えのき　がいと　おんびら　からかさだいら　なしだいら

# 榎垣外・扇平・唐傘平・梨平遺跡

# 発掘調査報告書

## （概　報）

平成３年度　榎垣外遺跡ほか発掘調査報告書

長野県岡谷市教育委員会

# 序

平成３年度の榎垣外遺跡ほか、岡谷市内遺跡の発掘調査及び試掘・確認発掘調査の報告書（概報）を刊行することになりました。

近年は個人住宅建設に関連した遺跡範囲内の土木工事が多く、本年の調査件数も41件にのぼりました。特に本年後半は農地転用申請が急増し、租税特別措置法の改正による影響を大きく受けるかたちとなりました。

今年度の調査では、榎垣外遺跡から掘立柱建物跡や平安時代の住居跡など多くの遺構が発見され、なかでも下片間丁地籍における直径３m深さ1.８ｍの特殊遺構は、官衙跡を考察するうえで大変貴重な発見となりました。

これら貴重な文化遺産を大切にして行かなくてはならないと同時に、この報告書が今後学術文化の向上に活用されることを願っております。

今年度の調査にあたり、土地所有者各位、工事関係者の方々、そして調査地に隣接した多くの皆様のご好意、ご協力にお礼申し上げる次第であります。また、発掘調査に携わっていただいた皆さんには、炎暑、厳寒の中を御苦労いただき感謝申し上げます。

平成４年３月１日

岡谷市教育委員会

教育長　齋　藤　保　人

# 例　言

1．本報告書は、平成３年度榎垣外遺跡ほか、岡谷市内遺跡発掘調査及び試掘・確認発掘調査の報告書（概報）である。
2．調査は、国および県から補助金交付を受けた岡谷市教育委員会が、平成３年４月16日から平成４年３月21日にかけて実施した。整理作業は主に１月～２月に行ったが出土品は十分な整理が終了していないため、概要の掲載にとどめてある。
3．出土遺物、記録図面、写真等の資料はすべて岡谷市教育委員会で保管している。
4．本報告書中の扇平遺跡は、発掘調査及び報告書作成までを三田村美日子氏が担当し、遺構・遺物の実測図は郷土の文化財15「梨久保遺跡」（1986年刊）の記述に準じた。

# 目　次

序
目次
1．平成３年度調査の概要……1
2．榎垣外遺跡下片間町地籍……3
3．榎垣外遺跡町頭北地籍……4
4．榎垣外遺跡蟹崎塚地籍……5
5．榎垣外遺跡榎海戸地籍……6
6．扇平遺跡……9
7．榎垣外遺跡下片間丁地籍……23
8．遺構の発見された試掘・確認発掘調査……25
9．新都市開発遺跡発掘調査……28

## 1．平成３年度発掘調査及び試掘・確認発掘調査の概要

平成３年度、岡谷市内において周知の遺跡に農地転用、公共事業等の開発行為が計画・実施され、市教育委員会が何らかの対応を実施した件数は50件をこえ、そのうち試掘・確認発掘調査は33件に及んでいる。そしてそれからさらに発掘調査したケースは６件２遺跡である。また、この他に新都市開発遺跡発掘調査を行った。本年度の調査の特徴は、ここ数年続いている傾向に同じで、長地方面の平坦部（湖北地区沖積地）に調査が集中していることである。従って、縄文時代の遺構・遺物は、扇平遺跡において小竪穴群が発見された以外は比較的少ない数である。これに対して奈良～平安時代の遺構・遺物が多く検出され掘立柱建物跡や墨書土器が発見された。

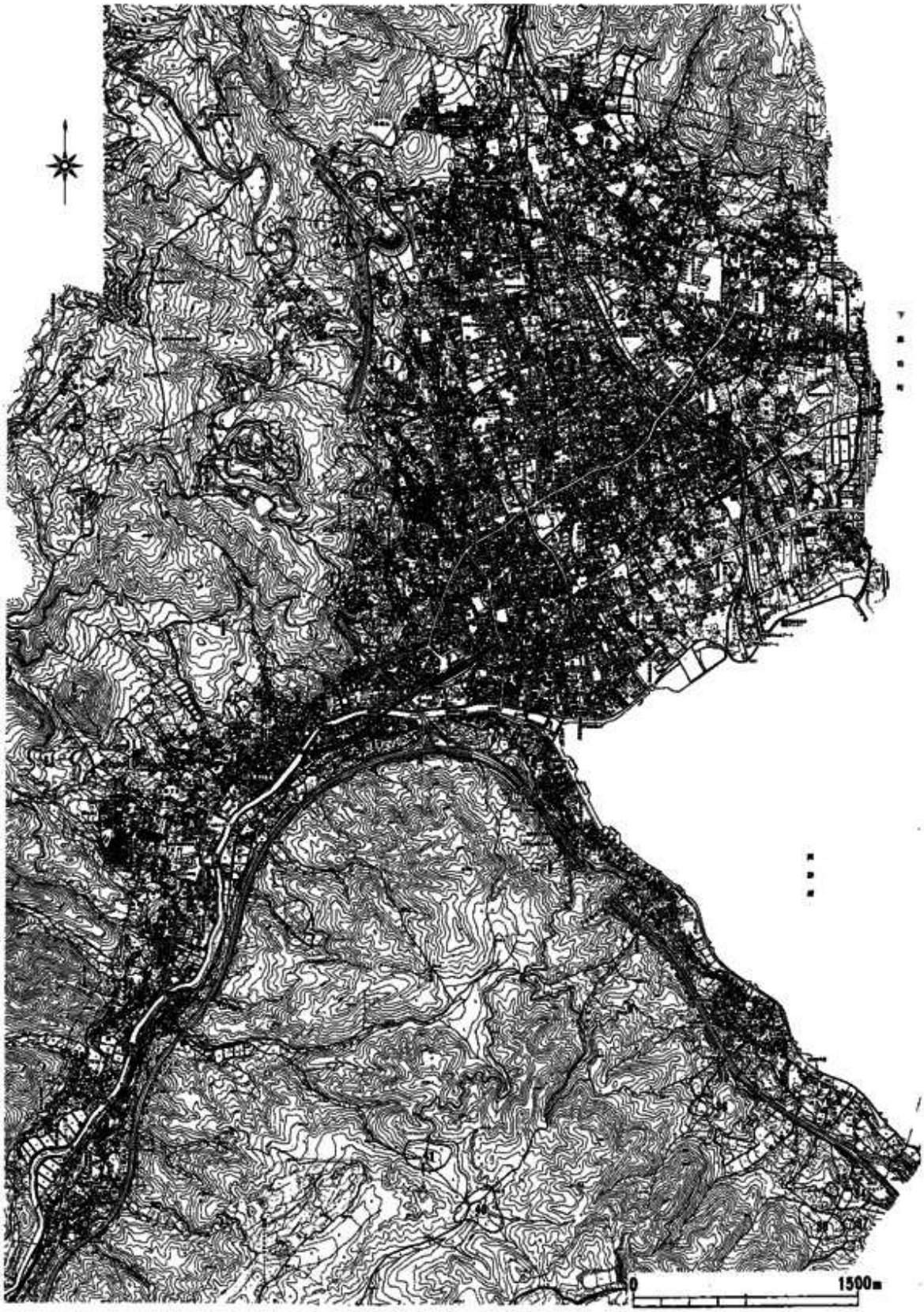
調査の中で注目すべきものは、唯一縄文時代の発掘調査となった扇平遺跡の成果であろう。昭和46年の上ノ原小学校建設にあたり、大掛りな発掘調査が行われ縄文時代中期初頭の集落が発見された場所から南に200ｍほど下がった所から約120基の小竪穴が発見され、集落との関係を考察するうえで大きな成果があった。

また、榎垣外遺跡においては、榎海戸地籍から多くの墨書土器が出土し、下片間丁地籍では掘立柱建物跡や半径３ｍ深さ1.8ｍの摺鉢状の竪穴が発見され、横河川の自然堤防ぎりぎりの所まで集落が広がっていたことが明らかとなった。僅かな面積の農地転用であっても確実に調査を継続することによって、これまでの調査で得られた成果をより一層充実させることができるばかりではなく、さらに広い遺構群全体を概観し遺跡の性格を確定することができるであろう。

なお、発掘調査については本文中にその概要を記したが、試掘調査によって遺構が発見されず発掘調査にいたらなかった箇所については以下の表によることにして詳細は省略した。

表１　平成３年度試掘・確認発掘調査一覧表

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査の原因 | 調査期間 | 主な遺構 | 遺構・遺物の時代他 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 榎垣外（下片間町） | 長地字下片間町2373-3 | 倉庫建設 | 4.16～ 6.12 | 平柱１棟掘立１ | 平安 | 緊急発掘 |
| 2 | 榎垣外（向田通） | 長地字向田通4753-11 | 駐車場建設 | 4.26～ 5.17 | 平住１棟 | 平安 | |
| 3 | 榎垣外（町頭北） | 長地字町頭北2764-13 | 住宅建設 | 6.12～ 6.27 | 平柱１棟 | 平安 | 緊急発掘 |
| 4 | 榎垣外（向田） | 長地字向田4715-1他 | 住宅建設 | 6.17 | | 平安 | |
| 5 | 清水田 | 長地清水田4292-1 | 資材倉庫建設 | 6.18～ 6.27 | 縄住１棟 | 縄文 | |
| 6 | 榎垣外（磨崎塚） | 長地字磨崎塚3685-20 | 住宅建設 | 7. 2～ 7.25 | 掘立１棟 | 平安 | 緊急発掘 |
| 7 | 牛平北 | 字西山1723-112他 | 国道20号線改修工事 | 7.17～ 8. 8 | | 縄文 | |
| 8 | 榎垣外（向田） | 長地字向田4714-4 | 店舗倉庫建設 | 7.19～ 7.20 | | 平安 | |
| 9 | 広畑 | 川岸上四丁目1574-2他 | 住宅建設 | 7.22～ 7.23 | | 縄文 | |
| 10 | 広畑 | 川岸上四丁目1570-1 | 住宅建設 | 7.22～ 7.23 | | 縄文 | |
| 11 | 広畑 | 川岸上四丁目1570-7 | 農耕用通路 | 7.22～ 7.23 | | 縄文 | |
| 12 | 榎垣外（金山） | 長地金山2931-1他 | 住宅建設 | 8.19～ 8.30 | 中世住２棟 | 中世 | |
| 13 | 榎垣外（古屋敷） | 長地古屋敷4113-6 | 住宅建設 | 8.27～ 8.28 | | 平安 | |
| 14 | 榎垣外（榎海戸） | 長地字榎海戸4048-10 他 | 住宅建設 | 8.27～ 9.23 | 平住11棟 | 平安 | 緊急発掘 |
| 15 | 榎垣外（榎海戸） | 長地字榎海戸4039-4　他 | 共同住宅建設 | 8.30～ 9. 9 | | 平安 | |
| 16 | 上屋敷 | 長地字下屋敷5262-1 | 駐車場建設 | 9. 4～ 9. 5 | | 縄文 | |
| 17 | 柳海途 | 字柳海途1453- ロ | 駐車場建設 | 9. 5～ 9. 6 | | 縄文 | |
| 18 | 扇平 | 長地上ノ原5797-2 | 住宅・駐車場建設 | 10. 8～12. 2 | 小竪穴　120 基 | 縄文 | 緊急発掘 |
| 19 | 榎垣外（榎海戸） | 長地字榎海戸4039-3 | 住宅建設 | 10.16～10.18 | | 平安 | |
| 20 | 榎垣外（榎海戸） | 長地字榎海戸4039-2 | 住宅建設 | 10.16～10.18 | | 平安 | |
| 21 | 榎垣外（向田） | 長地字向田4714-2 | 住宅建設 | 10.30～10.31 | | 平安 | |
| 22 | 梨久保（神明原） | 長地字神明原4611 | 住宅建設 | 10.31～11.18 | | 縄文 | |
| 23 | 榎垣外（下片間丁） | 長地字下片間丁2381-6他 | 住宅建設 | 10.31～12.30 | 平住４・掘立１ | 平安 | 緊急発掘 |
| 24 | 榎垣外（下片間丁） | 長地字下片間丁2377-1他 | 住宅建設 | 12.20～12.30 | 縄住１・平住２ | 縄文・平安 | |
| 25 | 地獄沢 | 字上ノ原216-1 他 | 資材置場 | 1. 8～ 1.17 | | 縄文 | |
| 26 | 長塚 | 川岸西一丁目3911-1他 | 駐車場建設 | 1.18 | | 縄文 | |
| 27 | 豊太郎垣外 | 長地字久保田5028-1他 | 住宅建設 | 2.12～ 2.17 | | 縄文 | |
| 28 | 榎垣外（上村） | 長地字上村3396-2他 | 住宅建設 | 3. 2～ 3.10 | 平住１ | 平安 | |
| 29 | 海戸 | 天竜町三丁目5317-7 | 住宅建設 | 3. 9～ 3.17 | 平安竪穴１ | 平安 | |
| 30 | 海戸 | 天竜町三丁目5330-2他 | 住宅建設 | 3.12～ 3.21 | | 平安 | |
| 31 | 天王垣外 | 中央町三丁目4793-1他 | 住宅建設 | 3.17～ 3.21 | | 弥生 | |
| 32 | 榎垣外（下片間町） | 長地字下片間町2379-1 | 駐車場建設 | 3.17～ 3.21 | | 平安 | |
| 33 | 上向 | 字上ノ原101-3 | 駐車場建設 | 3.19～ 3.21 | | 縄文 | |
| 34 | 井揚汐下 | 湊字井揚汐下567-1 他 | 新都市開発計画 | 4.23～ 3.21 | | 縄文・平安 | |
| 35 | 狐穴日向 | 湊字狐穴日向854 他 | 新都市開発計画 | 4.23～ 3.21 | | 縄文 | |
| 36 | 越道 | 湊字越道1699-1他 | 新都市開発計画 | 4.23～ 3.21 | | 縄文 | |
| 37 | 井揚 | 湊字井揚588 他 | 新都市開発計画 | 4.23～ 3.21 | | 縄文 | |
| 38 | 老婆久保 | 湊字老婆久保653 他 | 新都市開発計画 | 4.23～ 3.21 | | 縄文・平安 | |
| 39 | 矢垂 | 湊字矢垂2026 | 新都市開発計画 | 4.23～ 3.21 | | 縄文 | |
| 40 | 唐傘平 | 湊唐傘平 | 新都市開発計画 | 4.23～ 3.21 | | 縄文・平安 | |
| 41 | 梨平 | 湊梨平 | 新都市開発計画 | 4.18～ 3.21 | | 縄文・平安 | |




試掘・確認発掘調査地点（番号は表１の一覧表に同じ）

## 2．榎垣外遺跡下片間町地籍

1．発掘調査の場所　岡谷市長地字下片間町2373-3
2．土地の所有者　並木　志げ子
3．発掘調査の期間　平成３年４月16日～６月12日
4．発掘調査の目的・原因　住宅・倉庫建設
5．調査面積　253.6 ㎡
6．発見された遺構　平安時代住居跡１棟
掘立柱建物跡１棟
小竪穴・柱穴31基

**５号住居跡**　調査区北東に位置する比較的小型の住居跡であるが、前年度調査地の続きであるため、図面で観察すると２号住居跡に近接していることがわかる。平面形は、東西約3.2 m南北約3.5 mと２号住居跡よりやや小さい。掘り込みは北壁27cm南壁15 cm、北側にカマドを設けている。北壁のほぼ中央部にやや飛び出した部分があり、礫が集中していることや、礫を外したあとから少し熱を受けたと思われる火床面が検出されたことなどから、この部分がカマドであると推定される。床面は褐色土に直径１～３ cm の小石を含み、カマド付近と住居跡ほぼ中央部がやや堅い床になっている。床面には直径20 cm位の石があるが、意図的に設置されたものではない。柱穴は３本検出したが、どの穴もはっきりとした柱穴ではなく配置も不規則である。周溝は検出されなかった。

**掘立柱建物跡**　今回の調査区内からは31基の小竪穴または柱穴が発見された。この内５基の柱穴に配列が認められ、掘立柱建物跡１棟が南に延びていることが明らかとなった。

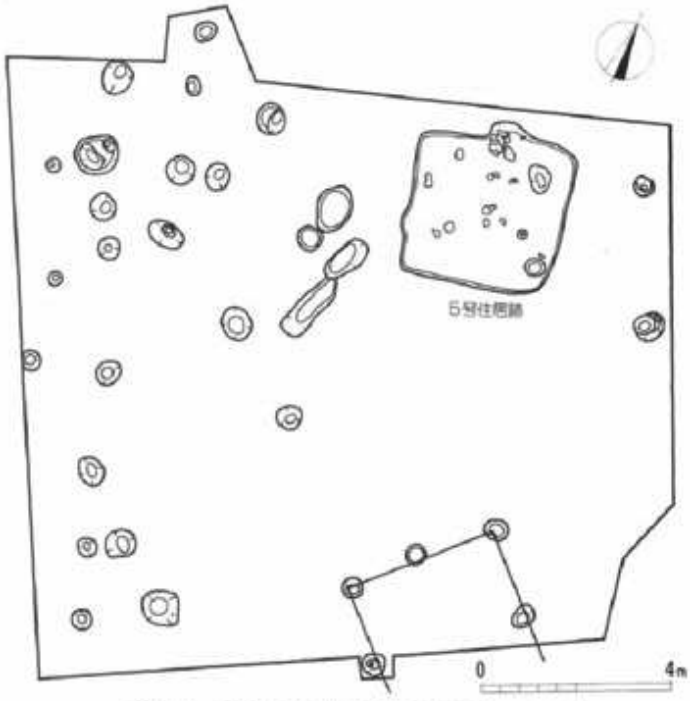
7．出土した遺物　縄文土器１　土師器坏１　墨書土器２　土師器高坏１　須恵器坏４　刀子２　鉄製品２　打製石斧12　石鏃２　凹石２　石皿１　土器片石片３箱

５号住居跡からは２個体の須恵器坏が覆土下層から出土している。また、墨書痕跡のある土師器坏が出土し、刀子などの出土も認められる。遺構外からは縄文時代のものと推測される打製石斧や石鏃等が出土し、縄文土器片も比較的多い出土である。これは縄文時代中期中葉の住居跡が発見された昨年度の調査地に隣接しているためであると思われる。

第１図　調査区全景

第２図　５号住居跡

第３図　ピット内遺物出土状態




第４図　下片間町地籍　遺構全体図（１：160）

## 3．榎垣外遺跡町頭北地籍

1．発掘調査の場所　岡谷市長地字町頭北2764-13
2．土地の所有者　　御子柴　善勝
3．発掘調査の期間　平成3年6月12日～6月27日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　　27.8㎡
6．発見された遺構　平安時代住居跡1棟

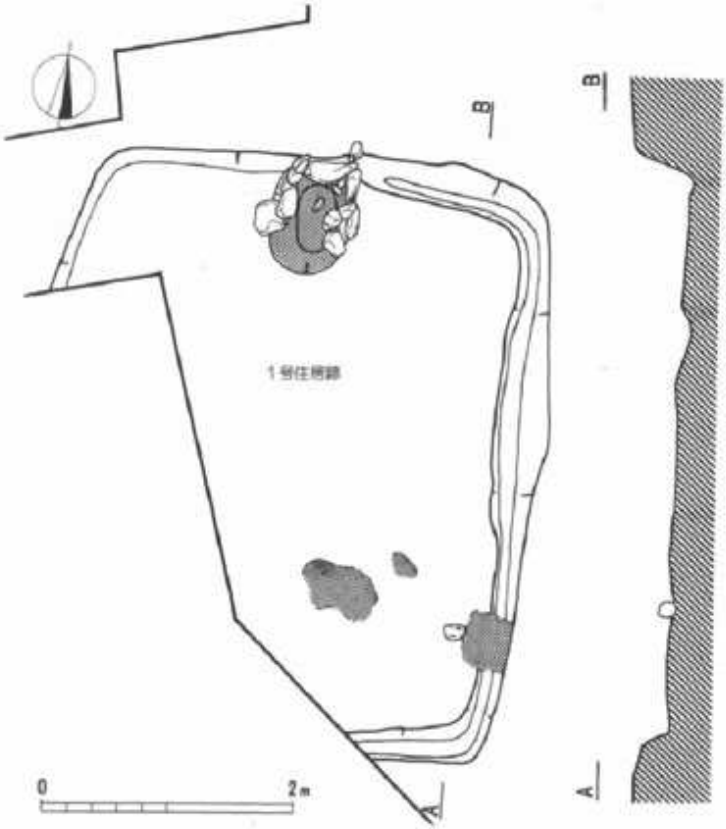
**1号住居跡**　平面形は東西約3.6ｍ南北約4.5ｍで南北にやや長い住居跡である。確認面が南に傾斜しているため南壁は15cm程しかないのに対して、北壁は25cmの高さを残す。カマドは残りの良い北壁のほぼ中央にあるため、天井部、両袖部が崩れずに残存している。袖幅約50cm、天井石までの高さ約52cmである。火床面の中央よりやや右寄りに支柱が設置されていた。支柱の高さは約16cmである。袖の中の石は長さ20～40cmの石を右袖では7個、左袖では4個を立てて使用しており、床面に3～7cm埋め込んで石を固定している。住居跡の外に延びると思われる煙道は検出されなかった。周溝はほぼ住居跡を全周するものと思われたが、東側は深さ4～5cmであるのに対して、西側は3cm位しかなく周溝が存在しない箇所があるものと思われる。床面はカマド付近から住居跡中央部が特に堅いが、壁に近づくと次第に明確な堅さがなくなっていく。カマド以外に住居跡南側の壁際に焼土の塊が検出されたが床面より6cm高く、黒色土を挟んでいる。柱穴は2本検出されたが深い掘り込みではないため主柱穴ではないと思われる。

7．出土した遺物　須恵器坏1　須恵器蓋1　土器片石片1箱

表面採集や耕作土を掘り進める中で遺物の採集は少なく住居跡の覆土を掘り進めても、床面まで掘り進める中で復原できるものは須恵器坏と蓋の2点だけである。坏は住居跡のほぼ中央の床面から出土した。

第5図　1号住居跡

第6図　カマド石組




第7図　1号住居跡平面図（1：60）

## 4．榎垣外遺跡蟹嶺塚地籍

1．発掘調査の場所　岡谷市長地字蟹嶺塚3685-20
2．土地の所有者　　宮沢　満雄
3．発掘調査の期間　平成3年7月2日～7月25日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　　140.3 ㎡
6．発見された遺構　掘立柱建物跡1　小竪穴・柱穴33基　弥生時代小竪穴1

**掘立柱建物跡**　今回発見された掘立柱建物跡は隣接する平成元年度調査地で発見されていた建物跡の続きである。その時の調査では2間×3間以上の大きさの建物跡であろうと推定されていたが、今回の調査により3間×4間の建物跡であることが確定した。元年度の調査では南側の柱穴が柱間が狭いためか重なり合っているものがあったが、今回の調査でも650P～652Pが重なり合っている。柱穴の直径は約100cm、深さ約70cm位でほぼ同規模の穴が配列されている。この建物跡のほかに33基の小竪穴または柱穴が発見されたが、建物跡としての配列は確認されなかった。

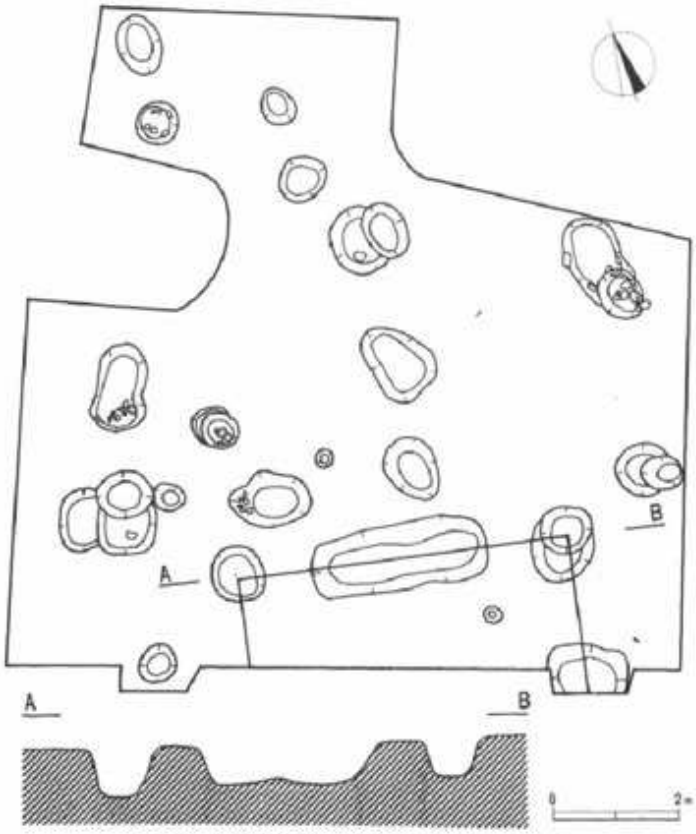
弥生時代小竪穴は調査区南側から検出されたが、掘り込みは浅く約28cmである。南側に隣接する平成元年度の調査では、やはり弥生時代の小竪穴と見られる遺構が発見されているが、今回の発見を含めても小竪穴群と言えるほどの数ではなく、どのような性格のもとに作られた遺構であるかは不明である。

7．出土した遺物　弥生土器1　土師器高坏1　打製石斧1　磨製石斧1　石鏃2　土器片石片1箱

今回の調査では、663Pから弥生土器が出土した。以前から同地籍では、弥生時代のものと思われる大型の打製石斧や（平成2年度調査）小竪穴（平成元年度調査）が発見されているが、散発的な発見、出土であり住居跡等の発見はなく、これらの遺物、遺構がどのような位置づけをされるのかはっきりしない。今後弥生時代の遺跡としての性格が継続的な調査により明確にされていくであろう。この他遺構外では褐色土より比較的まとまった縄文土器片が出土している。土師器、須恵器も住居跡等の生活遺構が発見されていないためか、遺物の破片数そのものが少ない。

第8図　遺構検出状態

第9図　調査区全景




第10図　蟹嶺塚地籍　遺構全体図（1：120）

## 5．榎垣外遺跡榎海戸地籍

1．発掘調査の場所　岡谷市長地字榎海戸4048-10 他
2．土地の所有者　　山田　栄
3．発掘調査の期間　平成３年８月27日～９月23日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　　198.9 ㎡
6．発見された遺構　平安時代住居跡11棟

**５号住居跡**　平面形は東西約5.3ｍ南北約８ｍの南北に長い方形の住居跡である。掘り込みは、検出面から北壁で約25㎝、南壁で約13ｃｍを測る。カマドは北壁のほぼ中央にあると推定される。右袖は壊されておりほとんど残っていないが、左袖は破壊を受けていない。カマドの左側と南側には直径50ｃｍの平石があるが、熱を受けたような痕跡はなくカマドを構成していた石ではないと思われる。周溝は北壁を除き、三方を巡る。柱穴は８本検出され主柱穴はＰ１，Ｐ３，Ｐ５である。この他に住居跡の東側に２本の柱穴があり、棚、出入口等の施設があったものと思われる。床面は砂利や小石を多く含む褐色土層を掘り込んでいるため、特に叩き締めた跡はないが、踏み固められたせいか全体に締まった堅い面を持つ。特に堅い部分は住居跡の中央部である。６号住居跡と重複するが５号住居跡が新しい。

**６号住居跡**　５号住居跡の南側に広がる住居跡である。平面形は北壁が５号住居跡に切られたり、西壁が調査区外へ延びているために正確な大きさが測定できなかったが、東西約６ｍ南北約６ｍと推定される。カマドは東壁、南壁からは検出されていない。北壁と推定される辺りには（５号住居跡のほぼ中央部）特に堅い面があること、西壁側にカマドを持つ例が検出されていないことなどを併せて考えると、本跡も北壁にカマドを持つと推定される。掘り込みは浅く４ｃｍであるため出土遺物も少ない。周溝は検出されず柱穴は１本発見されただけである。床面は顕著な叩き面はなく踏み固められた面が５号住居跡との境に広がっている。

**７号住居跡**　耕作土を剝ぎ、検出されていた11号住居跡の覆土を掘り進むと堅い貼り床が検出された。範囲は畑の耕作により攪乱を受け、不定型である。カマドの火床面かと思われる焼土が発見され、この南側に堅い貼り床が広がるため北カマドであったと思われる。床面からは周溝、柱穴の検出はされなかった。

**８・９・10・15号住居跡**　調査区南際から発見された住居跡でそのほとんどが調査区域から外れてしまうが、８・15号住居跡は北壁にカマドがあったために辛うじて調査ができた。北壁の長さは約10ｍと推定される。８号住居跡を掘り進めていくと北壁際の覆土に色

第11図　５号・６号住居跡

第12図　７号住居跡

第13図　８号・15号住居跡カマド石組

第14図　11号・14号住居跡

の違いが見られるようになり、床面まで検出し北壁面を精査すると北西角に切り合いを確認し15号住居跡の発見となった。掘り込みは比較的深く、砂礫層であるにも係わらず62cmを測る。しかし砂が崩れやすく、不安定な壁であり垂木痕跡等は検出されなかった。8号住居跡と15号住居跡はほぼ同じ位置に作られておりカマドの位置も15号住居跡のカマドの上に8号住居跡のカマドが重なっている。しかし、15号住居跡のカマドを破壊してしまうのではなく8号住居跡の袖としてそのまま使用している。カマドの石は全体に大きいものを使用しており直径20～30cmの物が使われている。周溝は15号住居跡に見られるが8号住居跡では検出されなかった。床面はよく踏み固められている。

9・10号住居跡は8号住居跡の北側に重なる住居跡で、9号住居跡は8号住居跡の北壁精査中に発見された住居跡である。10号住居跡は試掘調査の時に既に遺構として検出されていたが、これほどの重複を受けているとは予想されなかった。住居跡の新旧関係は10・9・15・8号住居跡の順番に並べられる。

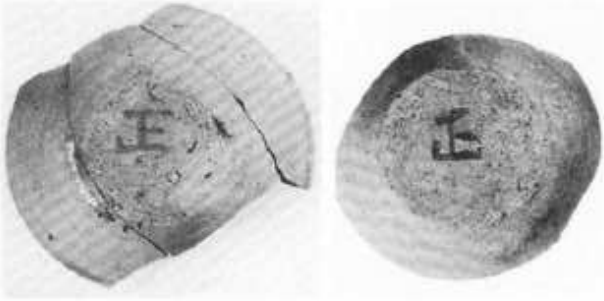
**11・13・14号住居跡**　11号住居跡は試掘調査で南壁が検出され住居跡のプランを確認するために拡張を行っていると大きな焼土の塊を検出した。この焼土については13号住居跡としたが、既に畑の耕作により激しい攪乱を受けているため、住居跡の全体形状を知ることができなかったが、おそらく東壁にカマドを持つ住居跡であると推定される。

11号住居跡の覆土を掘り下げると貼り床が検出されたため、これを追ってさらに広げていくと床面の北側に焼土を検出、これが7号住居跡となった。

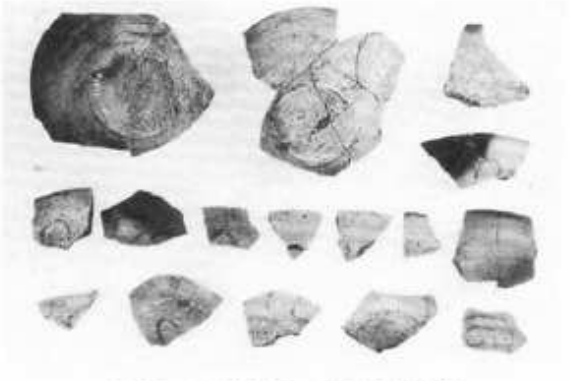
11号住居跡は東壁が調査区の外になってしまい全面を検出することができなかったが東西約6m南北約6mの住居跡であると推定される。掘り込みは北壁で約20cm南壁で約16cmを測る。周溝は西壁、南壁に掘り込みの深い周溝があることから東壁際にも同様の周溝があると思われる。カマドは北壁のほぼ中央にあるが、両袖は崩れ、壁際に袖石の一部と思われる幾つかの石が原位置を残すだけである。残存状態は悪いが辛うじて支柱が残っていた。この支柱は火床面に約10cm埋め込まれており火床面の厚さも18cmと非常に厚く焼けている。床面は、小石や砂利を混入した褐色土を掘り込んで作られている。周溝の基底部は砂利層まで掘り込んでいる。特に堅い面は南側から住居跡中央部そしてカマド付近であり、住居跡の東西の壁際ははっきりしない床である。柱穴は3本が配列良く検出されたが、4本目は検出できなかった。11号住居跡の床面を精査していると、床面の下に焼土を検出し14号住居跡とした。

第15図　11号住居跡カマド

第16図　12号住居跡




第17図　墨書土師器坏　8号住　11号住



第18図　5号住居跡　出土墨書土器片

14号住居跡は焼土の西側にわずかであるが床面が検出された。東側にカマドを持つ住居跡である。住居跡の平面形、柱穴の数などは不明である。

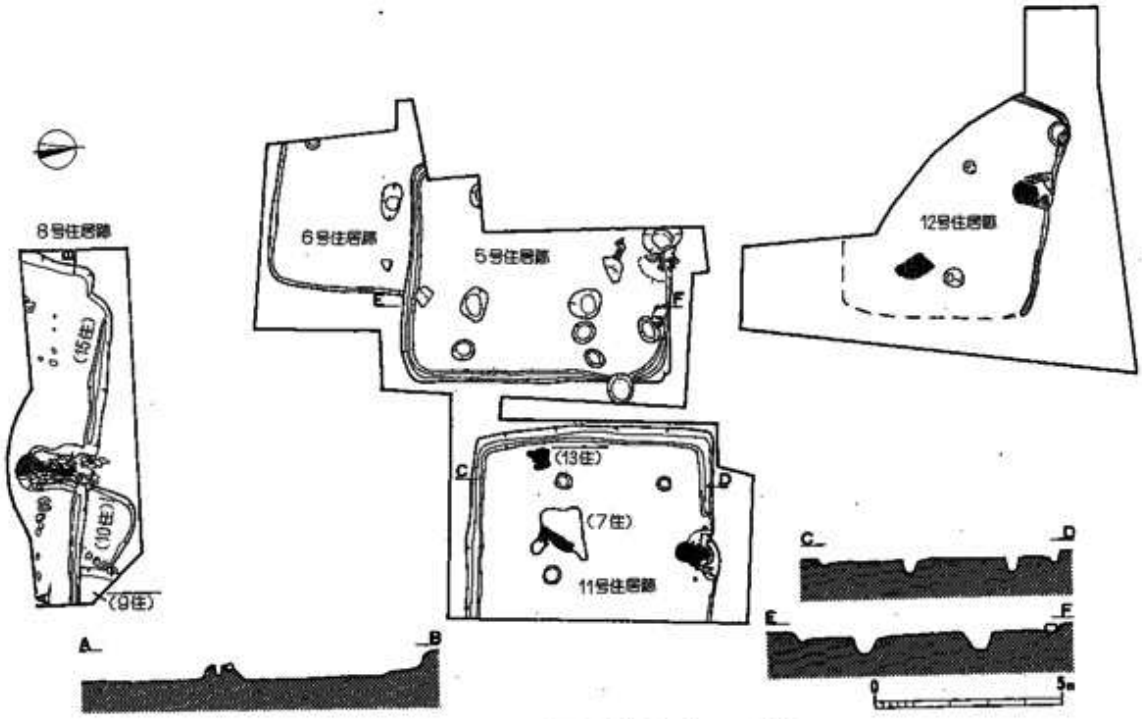
**12号住居跡**　調査区北側で検出された住居跡でありこれより北側に入れたトレンチでは遺構の検出はない。平面形は東西約5.7 m南北約5 mと推定される。しかし畑の耕作により住居跡南側と東側は立ち上がりを検出することができなかった。北壁は15 cmを測る。カマドは北壁の中央よりやや西側に位置する。天井、両袖の残存状態は良くない。袖石などほとんど残ってはいない。火床面の厚さは約6 cmである。床面はカマド付近から東側に向かって貼り床があるが、壁際になるに従い軟弱な床になる。柱穴は2本検出され、この他に北西隅に深さ18 cmの小穴が発見された。検出された北壁、西壁には周溝が巡っており、おそらく全周するものと思われる。

7．発見された遺物　土師器坏21　土師器甕2　須恵器坏5　墨書土器25　灰釉陶器坏1　鉄製品7　銅製品1　打製石斧2　石鏃1　火打ち金具1　土器片石片7箱

今回の調査では多くの遺物が出土した。5号住居跡では住居跡南側にほぼ同じレベルで遺物が集中していた。特に多いのは墨書土器を含む土師器坏であるが、文字の読めるものは少ない。カマドは北壁にあり、右袖付近からも土師器坏などの遺物が出土している。6号住居跡はカマドがあると推定される北壁が5号住居跡によって切られているため、遺物の出土量は少ない。8号住居跡は調査のできた面積は狭いがカマドの調査ができたため、遺物の出土量も多い。カマドの右袖横には直径20 cmほどの石が5個並んで出土し、そこから坏が折り重なるように出土した。この他にも銅製の引き出しの把手や火打ち金具が出土している。11号住居跡はカマド周辺に遺物が集中しているが、完形に復原できるものは少ない。土師器坏で墨書土器が出土している。12号住居跡は床面検出のときに、床に貼り付くような状態で土師器坏が出土した。調査をしてみると意外に遺物は少なく復原できる遺物はカマド周辺に土師器坏2点出土しただけである。

今回の調査で特に注目したいのは墨書土器である。文字の読める物は少ないが、「正」と書かれた同一の文字が5・8・12号住居跡から出土し、各住居跡が同時期に存在し何らかの関わりをもって存在していた可能性が強いことを示す資料となった。さらに5号住居跡からは意味不明のマーク(Ω)のような墨書のある土師器坏が多く出土している。意味不明のマーク状の墨書土器は榎垣外遺跡山道端地籍において「ᗰ」の文字が24片出土した例がある。

また、同じく5号住居跡から「□司」の文字がある土師器坏が出土したが、司の前は残念ながら読み取れない。一軒の住居跡からこれほど多くの墨書土器が出土するのは岡谷市内では数少ない例である。




第19図　榎海戸地籍遺構全体図（1：200）

## 6．扇平遺跡

1．発掘調査の場所　岡谷市長地字上の原5797-2
2．土地の所有者　　早出　貞雄
3．発掘調査の期間　平成３年10月８日～12月２日
4．発掘調査の目的・原因　住宅・駐車場建設
5．調査面積　　409.6 ㎡
6．発見された遺構と遺物
縄文時代前期初頭期住居跡１棟
〃　中期初頭住居跡１棟
〃　小竪穴120 基
縄文土器６　石鏃10　スクレイパー24
打製石斧56　磨製石斧３　摺石45　石皿９
凹石５　石錐３　土器片石片10箱

### （１）住居跡

**23号住居跡（第21図）**

Ｈ－10グリッドを中心に検出された住居跡であるが、大半は調査区外に残されており、規模は伴然としない。調査区内での掘り方を考慮すると、方形あるいは長方形プランの住居跡となろう。壁高は残存状況良好な東側で約19cmを測るが、北側は719Ｐに切られ、南側は耕作による攪乱により明確でない。東・南側の壁では一部周溝が巡り、径10～20cm程度の壁柱穴が穿たれている。主柱穴と思われるものは本調査区内では検出されなかった。床は炉址を中心として堅緻な箇所が認められるが、壁際に近づくにつれ軟弱となり、凹凸が激しくなる。炉址は地床炉で、ローム層を３～５cm程掘り込んで構築されている。掘り込みには焼土が堆積しており、火床面であるローム層も深さ約３cmに及び赤化していた。プランは、一部調査区外に残されており、不明である。なお、720・721Ｐは中期初頭の土器片が出土していること、本住居跡の床が小竪穴上面で確認されなかったことから、本住居跡より新しい遺構であると考えられる。

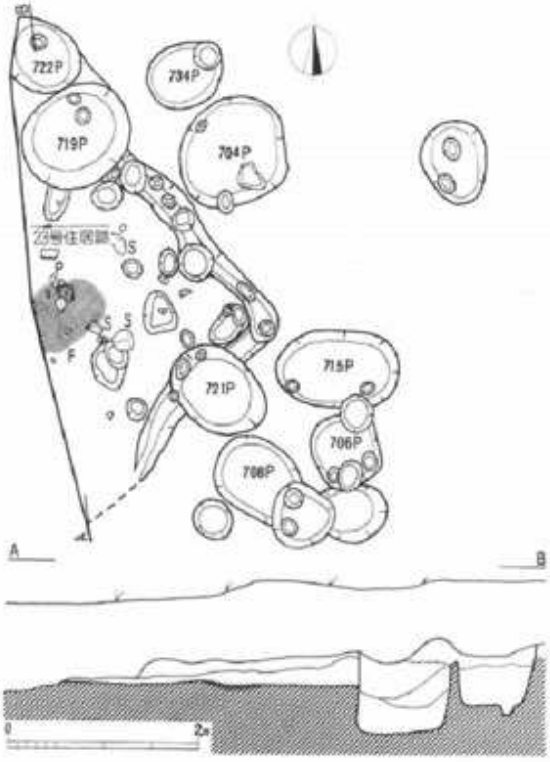
**23号住居跡出土遺物　（第23図）**

本住居跡から出土した遺物は、土器、石器、石片等である。土器は器形の窺えるものはなく、破片で出土したものが全てである。これらは縄文時代早期末葉に位置づけられる東海系土器と、縄文時代前期初頭に位置づけられる繊維土器の二者に大別される。

前者（１・２）は器壁が薄く、焼成良好である。口縁部には刻目を有する平坦な隆帯が巡り、胴部には垂下する条線が施される。後者（３～６）は器壁が厚く、脆弱で前者との区別は明瞭である。

３・４は口縁部に一条の隆帯が巡り、地文にはＲＬの単節縄文が縦位回転施文される。３は隆帯区画上は無文帯となる。４は口唇部・隆帯上にも縄文が施され、

第20図　調査区全景




第21図　23号住居跡平面図（１：80）

第22図　23号住居跡

その間が無文帯となる。

5はＬＲ単節縄文が縦位回転施文される胴部破片であり、6は2条1対の撚糸文が斜位に施される。

これら出土した土器は総破片数約200点を数え、東海系土器が約20点、繊維土器が120点となり、圧倒的に後者がその主体を占る。また、炉址直上からまとまって繊維土器が出土していることから、本住居跡は縄文時代前期初頭に帰属するものと思われる。

石器はチャートの石鏃(7)、黒耀石のスクレイパー(8)、磨石、剝片石器等が出土しているが、特筆すべきは、チャートの剝片が多量に出土していることであろう。

**22号住居跡　(第26図)**

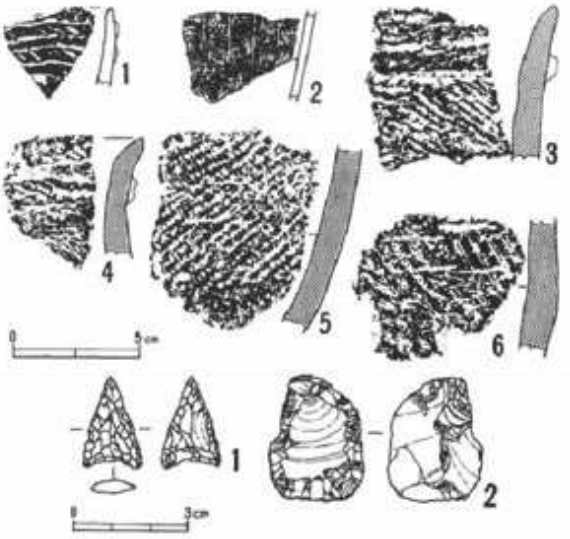
Ｉ－5、Ｈ－5グリッドを中心に検出された。長軸4.9m、短軸3.5mを測る楕円形プランになると思われるが、南・西側の壁は小竪穴とはなはだしく切り合っており不明瞭である。北側では壁高約40cmを測り、なだらかに立ち上る。東側は壁高約30cmを測りやや急峻となる。周溝は確認されていない。本住居跡に伴う柱穴は5本検出され、各深度、住居跡内での配置等を考えるとＰ－1～4の4本が主柱穴となろう。床はほぼ平坦で全面的に非常に堅く締まっている。炉址は地床炉であるが、その一部を695Ｐに切られて全体は明確でない。掘り込みは現存している部分では確認できず、火床面であるローム層もあまり赤化していないことから、全体的に貧弱な印象を受ける。本住居跡は前述の通り、多くの小竪穴と切り合っており、678・695・685Ｐはセクションで本住居跡より新しいことが判明した。他の小竪穴も覆土上層に床面となる硬化面が認められないことから、本住居跡より新しいか、本住居跡に伴う施設のいずれかであろう。

また、本住居跡は竪穴を確認した段階から覆土上層にロームブロックを多量に混入した黄褐色土が堆積しており、埋没過程において人為的な行為があったことを想起させ、注意を要する。

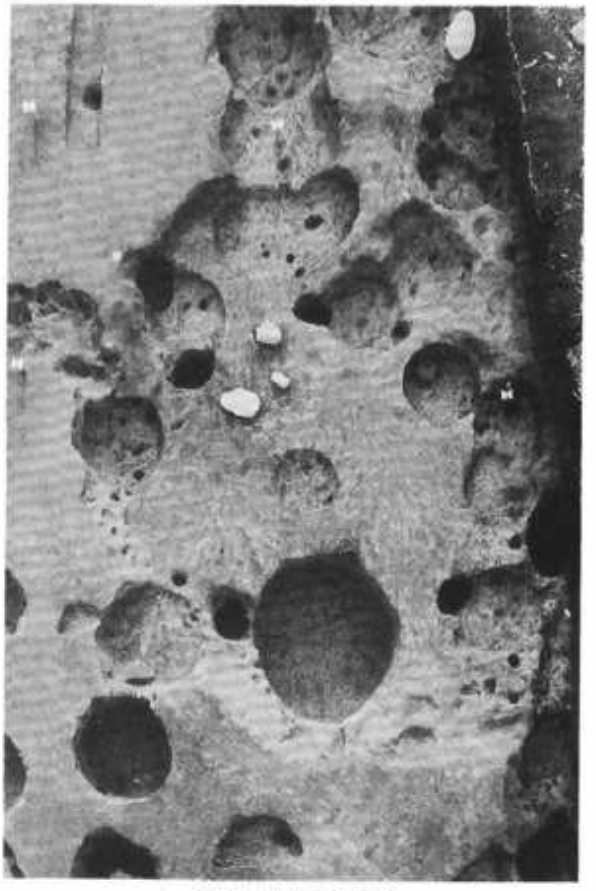
**22号住居跡出土遺物　(第27図)**

本住居跡から出土した遺物は土器・石器・石片等である。土器は器形の窺えるものはなく、全て破片である。これらは中期初頭に位置づけられるものだが、総点数約90点と極めて少なく、しかも小破片が多いことから本住居跡の時期決定を困難にしている。また、本住居跡を切って構築された小竪穴の土器片が混在している可能性が充分ありえるので、本住居跡は細部段階の比定は避けて、大まかに中期初頭に構築された住居跡として捉えたい。

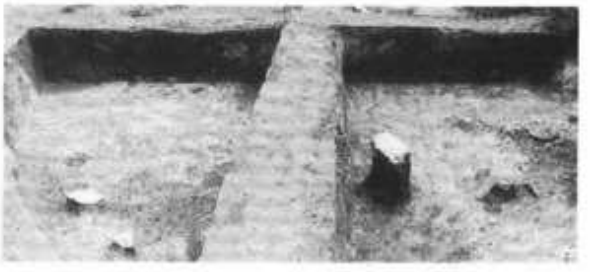
1は口縁部に斜位の沈線を施した後、交わるように




第23図　23号住居跡　出土遺物



第24図　22号住居跡



第25図　22号住居跡　土層堆積状態

ソウメン状の貼付文を付する。その下端に押圧隆帯が巡る。

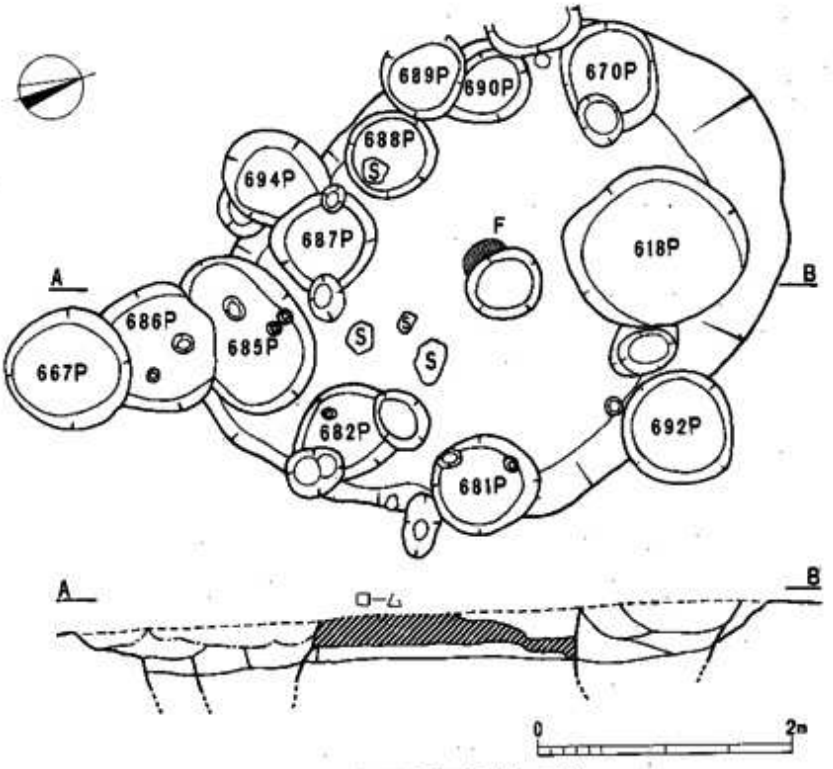
2は箆切沈線文が施される胴部破片である。

3はキャリパー形を呈する深鉢の頸部破片で、地文に結節縄文を施し、半截竹管による平行沈線が縦位に垂下する。

4は横位に巡る数条の平行沈線下に、半截竹管による格子目文が表出される。

5は木目状撚糸文を施す胴部破片で、前期末～中期初頭に位置づけられる北陸系の土器として捉えられよう。

石器はスクレイパー、打製石斧、磨製石斧、磨石などが出土している。このうち6の磨製石斧は基部が欠損した後、敲石として転用している。重さ105 gを測る。

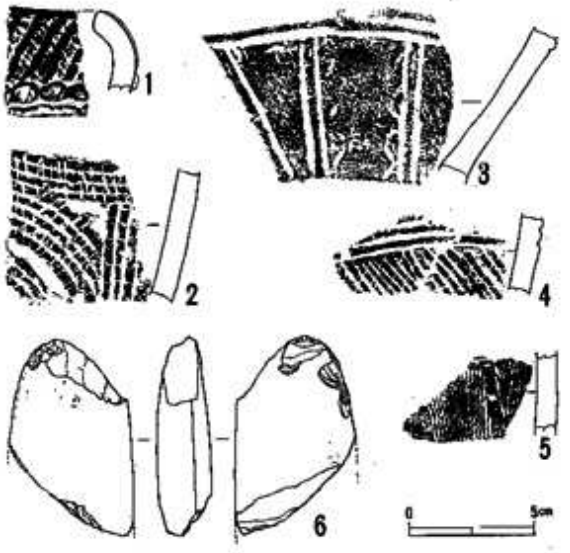


第26図　22号住居跡平面図（1：60）

（2）小竪穴

**601P　（第28図）**

H－2グリッドで検出された。平面は楕円形、断面はタライ状を呈す。口径長軸88 cm、短軸70 cm、底径長軸56 cm、短軸60 cm、確認面からの深さは34 cmを測る。覆土の堆積に特筆すべきものはないが、第1層暗褐色土層中に一部口縁を欠くもののほぼ完形の小型土器（第29図）が正位で出土したことは注意されよう。口径8 cm、底径5 cm、器高8.4 cm を測る。外面はナデによる器面調整を施し、部分的に縦位の条線が認められる程度のあまり装飾的でない土器である。内面はナデによる器面調整、斜位の条線が施されるが付着物等は確認されなかった。また、本土器が出土した層から、中期初頭に比定される土器片が出土している。



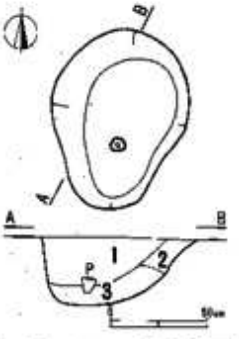
第27図　22号住居跡　出土遺物

**612P　（第30図）**

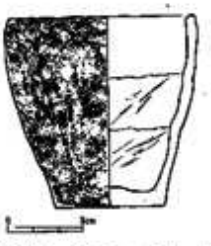
H－3・4グリッドで検出された。平面は円形、断面は坑底が若干ハングするもののほぼ円筒形を呈す。口径80 cm、底径70 cm、確認面からの深さは80 cmを測る。本小竪穴では第1層下位で投げ込まれたように出土した礫と第4層中で横位に検出された平石が注目される。この平石を除いたところ、平石に密着するかたちで黒耀石製の石鏃（第30図）が出土した。土器は中期初頭に比定される破片が10点程度出土した。

**629P　（第34図）**

G－4・5グリッドで検出された。平面は楕円形、



第28図　601P　平・断面図


第29図　601P　出土土器

断面はタライ状を呈す。口径長軸90cm、短軸65cm、底径長軸60cm、短軸40cm、確認面からの深さは50cmを測る。本址で注意されるのは、覆土上面で直立して出土した石皿（第34図）とローム粒子を多量に混入する第2層の存在であろう。両者とも自然に埋没する過程では解釈困難な検出状況と思われる。また、後者のような覆土の堆積は他の小竪穴でもいくつか見受けられ、小竪穴の性格を考える上で検討を要する。出土遺物は前述した石皿の他、中期初頭に比定される土器片約10点と坑底から磨石4点が出土しているのが注意される。

**635P　（第35図）**

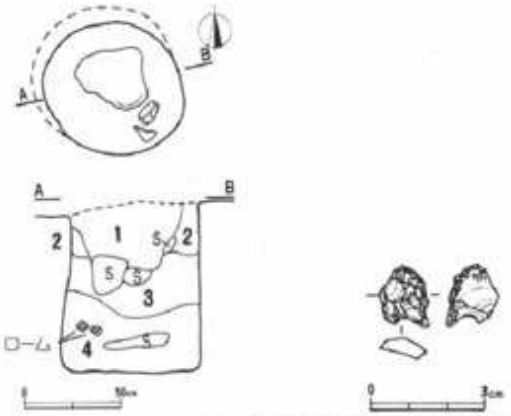
C－3・B－3グリッドで検出された。平面は円形、断面はタライ状を呈す。口径90cm、底径70cm、確認面からの深さは60cmを測る。本址で注意されるのは、第4層とした焼土の堆積と、その上面でまとまって出土した土器片（第37図）と磨石であろう。これらはいずれも本址が埋没する課程で投げ込まれた可能性がある。土器はいずれも中期初頭に比定されるもので、1は竹管による平行沈線で横位に区画された文様帯に、連華文、縦位平行沈線を施す。文様が収束する部位には縦位に突起が施される。2は横位の竹管による平行沈線の上段に、同様の工具で縦位の平行沈線が、下段は地文にRL単節縄文が縦位回転施文された後、連続円弧文が施される。3は底部破片で、RL単節縄文が横位回転施文される。このうち、1の連華文は北陸系の文様要素であり、2の連続円弧文が施され土器片と供伴しているのは興味深い。

**678P　（第32図）**

I－4・5グリッドで検出された。本址は22号竪穴住居跡を切って構築されている。平面は円形、断面はフラスコ形を呈す。口径120cm、底径140cm、確認面からの深さ60cm（確認面は22号住居跡の床面であるため、本来の深度はさらに増すものと考えられる）を測り、今回の調査で最も規模の大きい小竪穴のひとつである。本址では覆土上層において、炭化したクルミ（第33図）が出土しており、本址が貯蔵穴として機能していたことを窺わせる。また、中期初頭に比定される土器片が10点程度出土している。

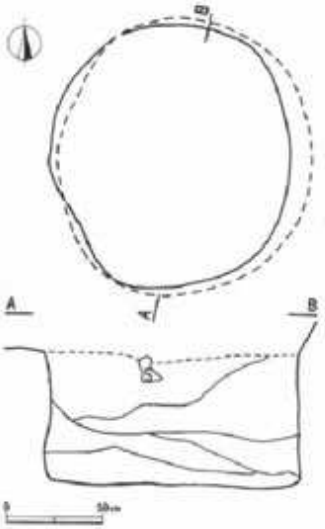
**625・626P　（第41図）**

E－3・4グリッドで検出された。両者は切り合っており、626Pが新しく構築されたことがセクションより確認された。両者とも平面は円形、断面はタライ状を呈す。口径100cm、底径80cmを測り、ほぼ同規模の小竪穴である。625Pでは、坑底から小形土器（第39図）が斜位に出土している。器高21cm、口径10cm、底径9cmを測る。底部から口縁部に向け、若干外傾



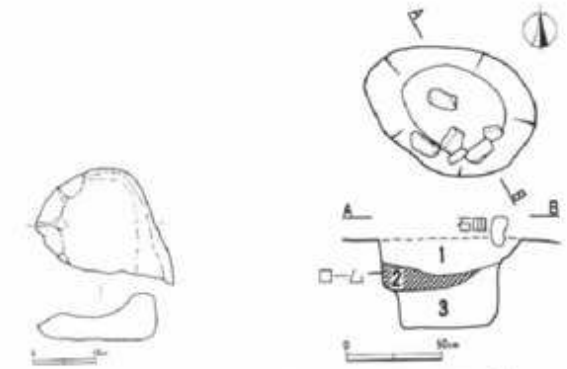
第30図　612P　平・断面図（左）出土石器（右）

第31図　612P



第32図　678P　平・断面図

第33図　出土したクルミ



第34図　629P　平・断面図（左）629P出土石皿（右）

しながら立ち上り、口唇部は内傾する深鉢で、外面は縦位に条痕文が施されるのみであり、601P同様、非装飾的な土器である。内面は横位に条線が施され、器面調整が行われている。口縁部外面及び、内面底部付近には黒色の煤状付着物が多量に認められる。626Pでは、覆土下層のほぼ同レベルから土器片、磨石などがまとまって出土した。これら遺物の出土した層の上にはローム粒を多量に混入した層が帯状に堆積しており、本址の性格を考える上で注目されよう。

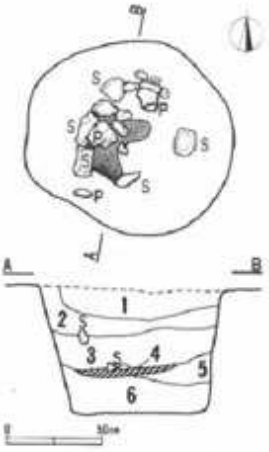
出土した土器（第42図）はいずれも中期初頭に比定されるもので、1は器形の窺える大型破片である。胴部から口縁部へ向け直線的に外傾する深鉢で、口唇部には扇状の突起が付され、4単位になると思われる。現存する部位では横位に区画された文様帯が3段認められる。文様はいずれも竹管による平行沈線で表出されており、上段（口縁部文様帯）は斜位に平行沈線が施される。中段は鋸歯状の平行沈線が縦位に施され、さらに文様帯を区画する。区画内には斜位の平行沈線及び、実測図では確認できないが同心円状のモチーフが描かれ、その下端は下段の文様帯へ延びている。下段は平行沈線が縦位に施される。

2はキャリパー形を呈する深鉢の口縁部破片で、口縁部には斜位の平行沈線が施される。頸部は地文にLR単節縄文が横位回転施文され、縦位の平行沈線が施される。

3は横位に巡る平行沈線に区画された文様帯内に格子目文と、クランク状のモチーフが描かれる胴部破片である。

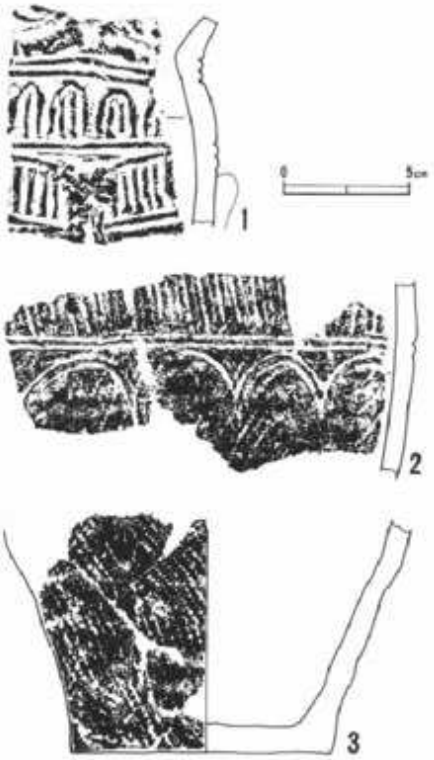
4は底部破片で、平行沈線によりY字状のモチーフが描かれる。

5は北陸系土器把手部の破片で、その形態は水鳥の頭部を模した様である。頭部及び口唇部には撚糸文が施され、竹管による連続爪形文と同様の効果を出している。撚糸文と併走するように、竹管による結節沈線が施され、区画内は同様の文様が横位に充填施文される。把手部は空洞となり、頭部の円孔は胴部内面の孔と繋がっており、左側口唇部には補修孔と思われる穴が穿たれている。器面には内外面及び、割れ口にまで黒色の煤状付着物が認められる。




第35図　635P　平・断面図

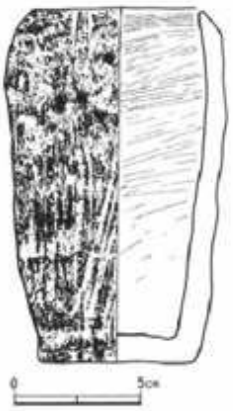
第36図　635P　遺物出土状態



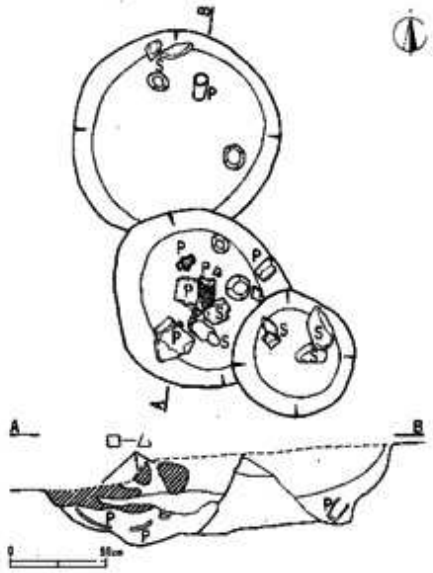

第37図　635P　出土土器

第38図　625P・626P　遺物出土状態

第39図　625P　出土土器



第40図　625P出土土器実測図




第41図　625P・626P　平・断面図

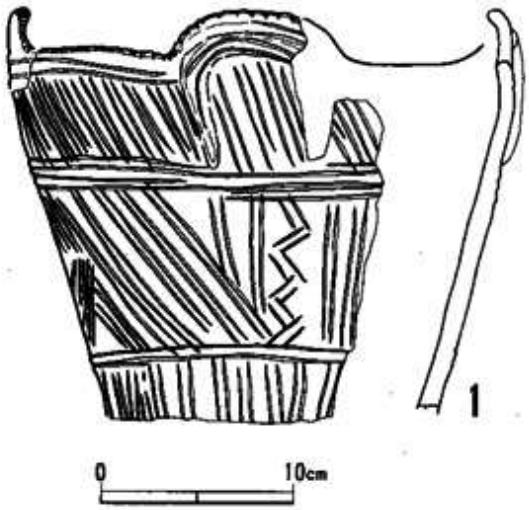
6は長軸10cm、短軸8cmを測る楕円形の磨石で、表面には凹部が認められる。重さは240gを測る。

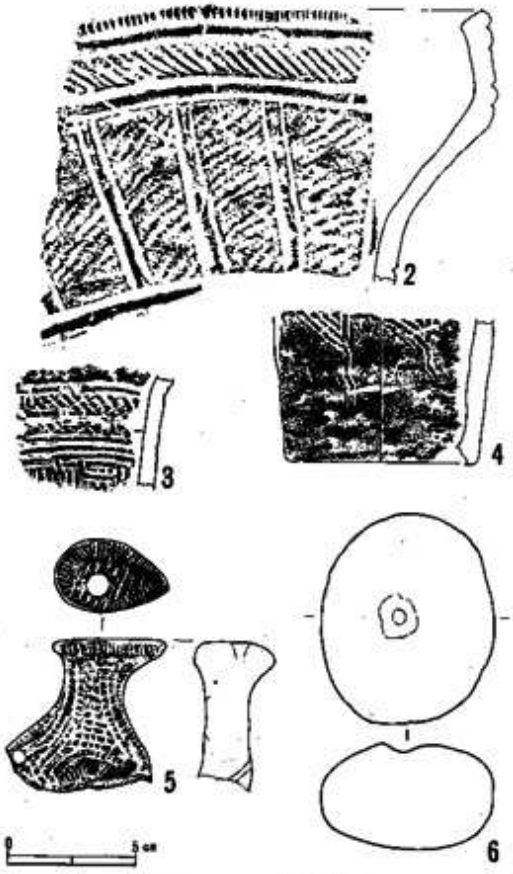
この2基の小竪穴は覆土の堆積、遺物の出土状況は異なるが、その断面形態がタライ状で極めて近似していること、小型完形土器の出土状況、ローム粒子が多量に混入する層が帯状に堆積していることなどから、墓壙としての共通の性格が推察できないだろうか。また、626Pから出土した北陸系の土器と在地系の他の土器群との共伴関係も、今後検討しなければならない問題であろう。

**647P　（第43図）**

F－6・E－6グリッドで検出された。平面は円形、断面は円筒形を呈す。口径70cm、底径60cm、確認面からの深さは60cmを測る。本址では坑底からほぼ完形の深鉢（第45図1）と覆土中層から無文口縁部破片（2）、底部破片（3）が出土している。

（1）は口径17cm、底径10cm、器高22cmを測り、キャリパー形を呈す。口縁部は竹管による連続爪形文と平行沈線で区画された文様帯内に斜位の平行沈線を施し、爪形文を施した粘土紐の突起を4単位付す。頸部は横走する平行沈線で区画され、縦位の平行沈線が施される。区画下にはY字のモチーフが描かれる。なお、頸部から胴下半にかけてRL単節縄文が横位回転施文される。



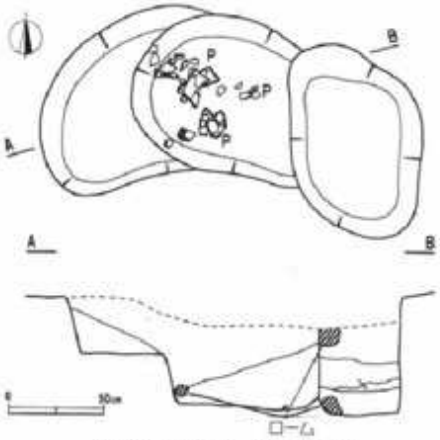

第42図　626P　出土遺物

3は底部が張り出す形態となり、復原底径は23cmを測る。文様はRL単節縄文及び結節縄文が施される。

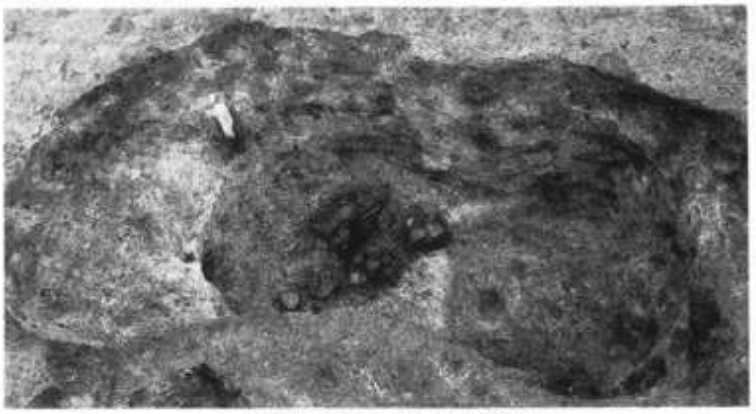
**680P　（第47図）**

H－8グリッドで検出された。平面は楕円形、断面は皿状を呈す。口径長軸86cm、短軸70cm、底径40cm、確認面からの深さは25cmを測る。本址で特筆されるのは、打製石斧7本（第49図5～11）と50点に及ぶ土器片が出土したことであろう。打製石斧は遺構南側覆土上層でまとまって出土した。これらの打製石斧を取り上げさらに覆土を掘り下げたところ、3×3、5×5cm大の土器片が多数検出された。

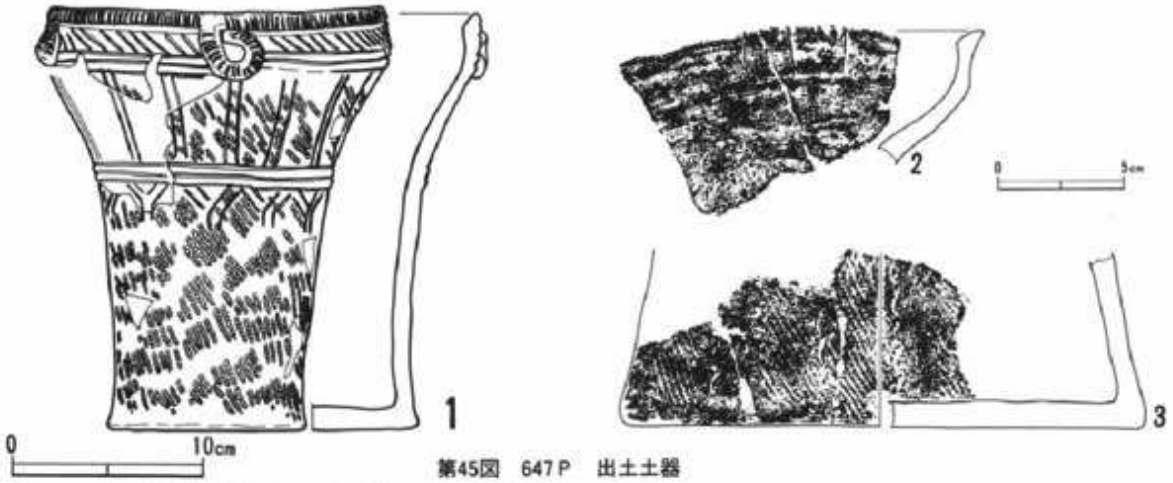
土器（第49図1～4）は数個体に及ぶが、復原して器形の窺えるものはない。1は口縁部文様帯に橋状把手




第43図　647P　平・断面図



第44図　647P　遺物出土状態




第45図　647P　出土土器

が付され、細線文が垂下する。要所には三角印刻文が施される。2は口縁部文様帯が省略されるものであろう。区画文である横位平行沈線のみ施される。区画文下はLR単節縄文が地文として施文され、Π字状の平行沈線が垂下する。3は球形を呈する胴部破片である。隆帯と平行沈線による横位区画がなされ、さらに平行沈線で縦位の区画文が施される。区画内はRL単節縄文が縦位回転施文され、刺突が施される。4はキャリパー形を呈する深鉢の口縁部破片である。口縁部には「の」字状の突起が付され、格子目文が施文される。頸部は地文に結節縄文を施した後、平行沈線を垂下させる。胴部は平行沈線で波状文等を描くが、モチーフが判然としない。

5はほぼ完形の打製石斧で、刃部の表裏とも磨耗が認められる。重さ80g。6はほぼ完形の打製石斧、表裏とも刃部がよく磨耗している。重さ65g。7もほぼ完形で、右下の刃部が特に磨耗している。片側の側縁は念入りに微調整が行われている。重さ58g。8は基部のみ残存する。重さ22g。9は刃部を一部欠損する。48g。10は基部を欠損するが、刃部は表裏面とも磨耗している。重さ120　g。11は刃部、基部を欠損する。重さ80g。

第46図　680P　打製石斧出土状態

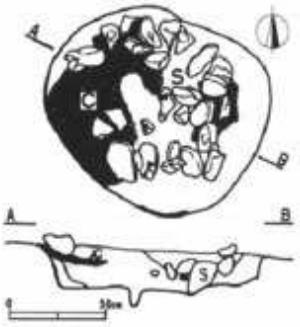
第47図　680P　平面図

第48図　680P　遺物出土状態

第49図　680P　出土遺物

**724P　（第50図）**

B－8グリッドで検出された。平面は円形、断面はタライ状を呈す。口径100cm 、底径90cm、確認面からの深さは20cmを測る。本址はプラン確認の段階から炭化材ブロックが多量に検出され、覆土は漆黒を呈していた。壁際には礫が配され、礫の下から形状のしっかりした炭火材が検出されている。出土した礫は赤化し、一部ひび割れて、明らかに二次的加熱を受けている。焼土も僅かであるが検出されており、本址が屋外炉として機能していたことを窺わせる。遺物は中期初頭に比定される土器片が若干出土している。




第50図　724P　平・断面図

第51図　724P　礫出土状態

**705P　（第54図）**

E－9・10グリッドで検出された。平面は円形、断面は若干袋状を呈す。口径100cm 、底径90cm、胴部最大径95cm、確認面からの深さは40cmを測る。本址では柱痕跡（第1層）が確認された事と、第4層としたローム粒子を多量に混入する暗黄褐色土層の堆積が注目されよう。本址には柱痕跡の認められた柱穴の他、7個の小穴が認められ、上屋構造の存在が予測される。

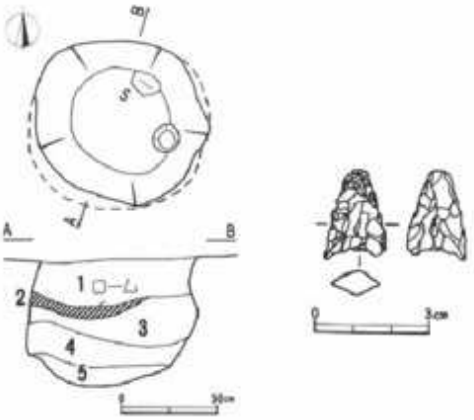
また、第4層は壁際のほぼ対称の位置で堆積しており、本来オーバーハングしていた上端が崩落して形成されたものと思わせる。遺物は中期初頭の土器約40点、磨石2点が出土している。

**674P　（第52図）**

C－8グリッドで検出された。平面は円形、断面は袋状を呈す。口径80cm、底径50cm、胴最大径90cm、確認面からの深さは65cmを測る。本址においてもローム粒子を多量に混入する第2層が覆土上面において帯状に堆積しているのが注意されよう。このような堆積がオーバーハング部の崩落で形成されたものか、人為的に投げ込まれて形成されたものか検討の余地がある。遺物は中期初頭に比定される土器片が約10点と黒耀石製の石鏃（第52図）1点が出土している。

**723P　（第55図）**

C－7・8グリッドで検出された。平面は円形、断面は円筒状を呈す。口径65cm、底径60cm、確認面からの深さは30cmを測る。本址は覆土上層において5×5cm大の小礫がまとまって出土した。礫に被熱した痕跡は認められず、どのような目的でこのように礫を配したのか疑問が残る。出土遺物は、中期初頭に比定される土器片が若干出土している。



第52図　674P　平・断面図（左）出土遺物（右）

第53図　674P　土層堆積状態

### （3）出土土器（第58図1～13・第59図14～21）

1は668Pから出土した。平縁の口縁部破片で、平坦な隆帯で波状のモチーフが表出され、下端は同様の隆帯が横走し文様帯を区画する。隆帯上には条線が垂下する。早期末葉に比定される東海系土器である。

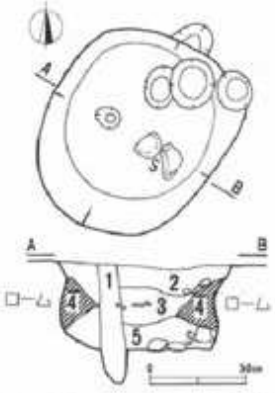
2は735Pから出土した。口縁部には斜位平行沈線上にソウメン状の隆帯を貼り付け、格子目文を表出する。下端には2条の結節状浮線文が横走し、文様帯を区画する。胴部はLR単節縄文が地文として施され、ソウメン状隆帯が付される。

3も735Pから出土している。外傾する口縁部は無文帯となり、下段は平行沈線で横位区画され、斜行沈線、鋸歯状沈線等が施される。

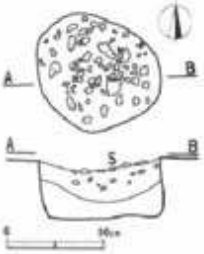
4は656Pから出土した。内湾する口縁部は連続爪形文を施す隆帯で横位区画され、文様帯を形成する。文様帯内は細線文が充塡され、2cm大の円形突起を中心に連続爪形文による三叉文が描かれる。要所には三角印刻文が施される。下段も連続爪形文で区画され、細線文が縦位充塡施文される。また、1cm大の瘤が垂下する。

5は750Pで出土した。連続爪形文で飾られた橋状把手を有する口縁部破片で、把手下には三角形・U字状のモチーフが描かれ空白部を細線文が充塡する。

6は728Pで出土した。口唇部下に細線文と三角印刻



第54図　705P　平・断面図



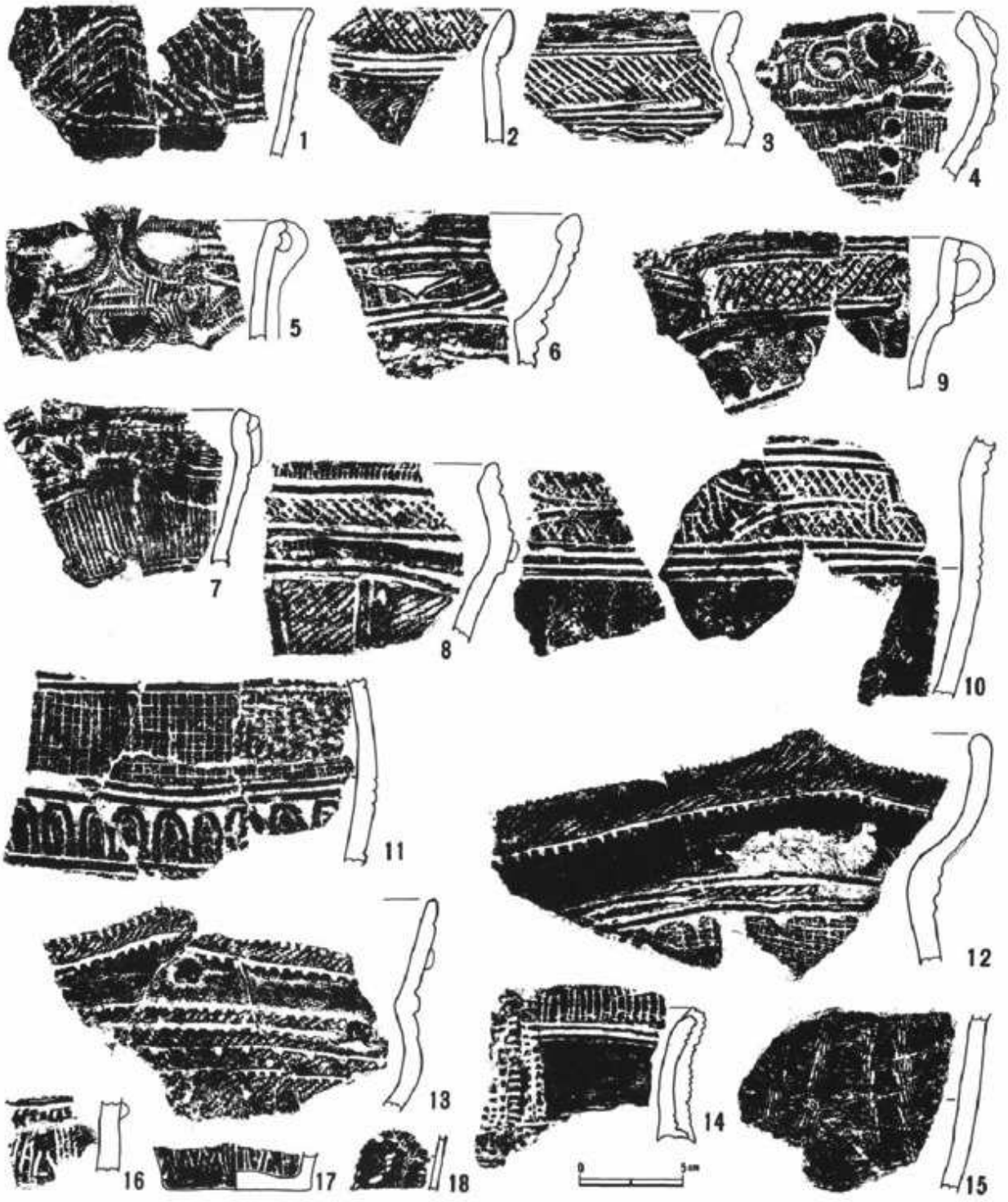
第55図　723P　平・断面図

第56図　723P　礫出土状態

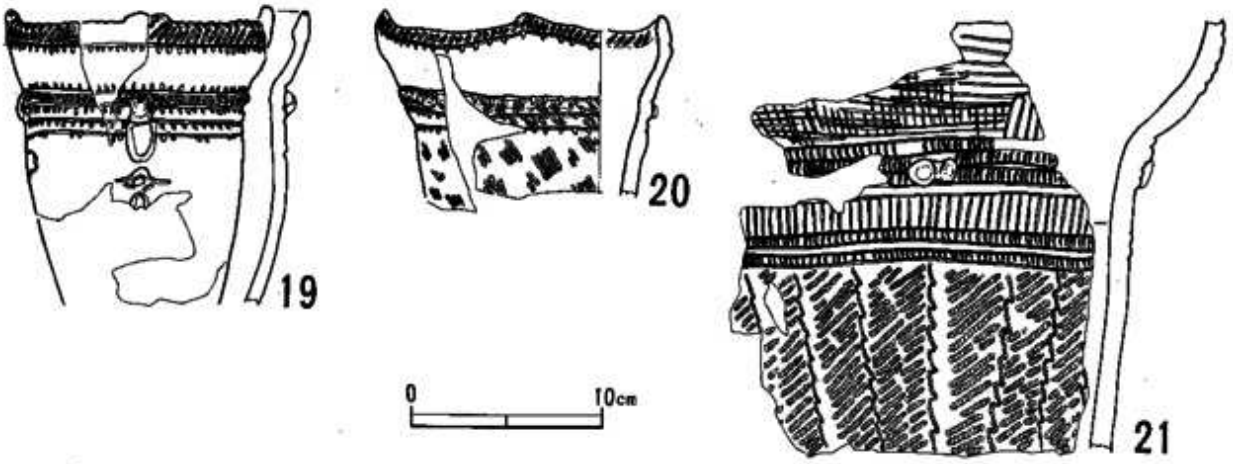
文を施し、横走する平行沈線が下端を区画する。区画下は細線文を格子目に充塡し、三角印刻文等が平行沈線で描かれる。

7は627Pから出土したキャリパー形の口縁部破片で、瓦状の押引き文が施され連続爪形文を施す隆帯と、平行沈線で文様帯を区画する。またモチーフは判然としないが、隆帯による突起が付される。頸部には縦位

第57図　741P　土器出土状態




第58図　扇平遺跡出土土器




第59図　扇平遺跡出土土器

に沈線が垂下し、下端は横走する平行沈線で区画する。

8もキャリパー形を呈する口縁部破片で、横走する連続爪形文で区画された文様帯に格子目文が施される。頸部は地文にＬＲ単節縄文が横位回転施文され、平行沈線が垂下する。

9は718Ｐから出土した。口縁部には橋状把手が付され、斜位の平行沈線とソウメン状の隆帯貼付で格子目文を表出する。頸部は刺突を伴う平行沈線で区画され、結節縄文が施される。

10は652Ｐで出土した胴部破片で、横走する平行沈線で文様帯を区画する。区画内には格子目文が施され、平行沈線によりクランク状のモチーフを描く。文様帯下には結節縄文と第一種結束によるＲＬ・ＬＲ単節縄文が縦位回転施文され羽状縄文を表出する。

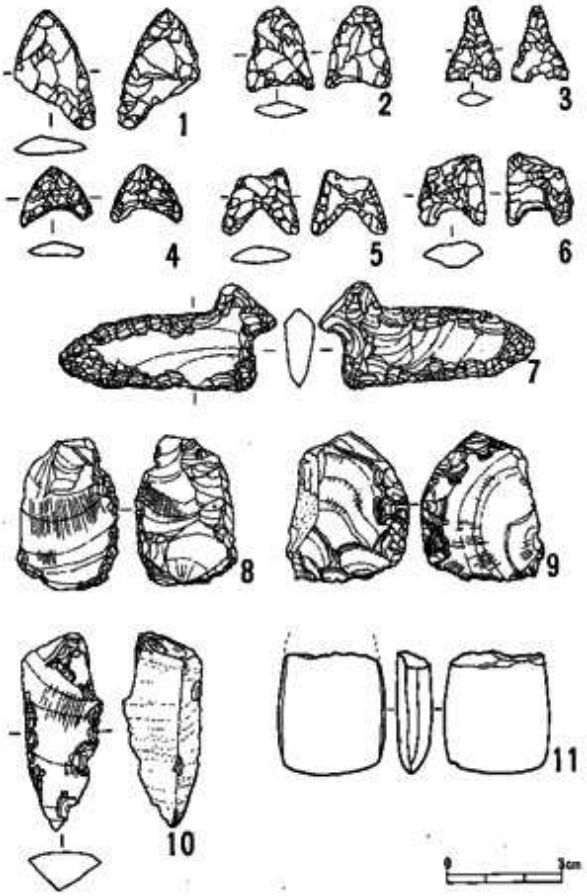
11は603Ｐから出土した胴部破片で、平行沈線の横位区画された文様帯が２段認められる。上段は格子目文が、下段には連華文が施される。

12は700Ｐで出土した。波状を呈する口縁部破片で、口唇部には刻文が施される。口縁部はＬＲ単節縄文が帯状に施文され、下端を刺突を有する沈線で区画する。区画下は無文帯となり、括れ部に平行沈線と縄文帯が巡る。胴部は格子目文が施され、上端に三角印刻文が認められる。

13もほぼ同様の文様構成で、波頂下及び括れ部の縄文帯には突起が付される。胴部はＬＲ単節縄文が施される。

14は737Ｐから出土している。口唇部に撚糸文が施され、結節浮線文が垂下する。口縁部は無文帯となり、下端は横走する結節浮線文で区画される。

15～17は木目状撚糸文を施す土器で、15は735Ｐ、16は745Ｐ、17はＦ－５グリッドから出土した。

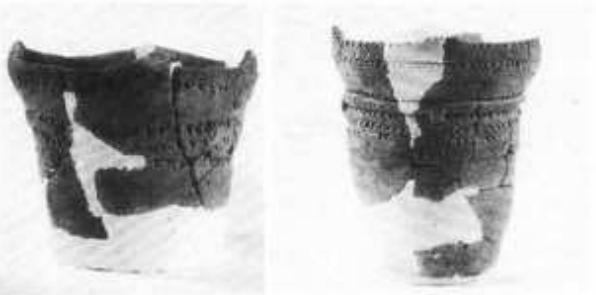



第60図　扇平遺跡出土石器

第61図　扇平遺跡出土石器

18はE－5グリッドから出土した胴部破片である。器壁は5mmを測り他の土器に比べ薄く、地文には原体の大きな単節縄文が施され、幅広の爪形文のある平坦な隆帯が付される。

19は741P覆土上層で一括出土した深鉢である。口縁部には刻文が施され、4単位の突起を付す。口縁部にはLR単節縄文が縦位回転施文し、下端には刺突を伴う沈線が巡る。括れ部には橋状把手を付す縄文帯と刺



第62図　610P・737P　出土土器

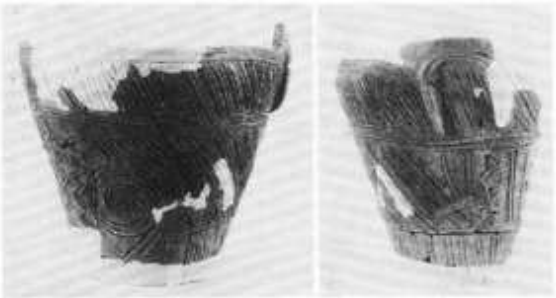
突を伴う沈線が4条巡る。胴下半には沈線により幾何学的なモチーフが描かれる。

20は610Pで出土した。19と同様の文様構成であるが、橋状把手は単なる突起となり、波底部に対応して付される。胴下半はLR単節縄文が縦位回転施文される。

21は752Pの覆土上層で一括出土した。口縁部には格子目文が施され、括れ部には連続爪形文を施す平行沈線が、縦位沈線文帯を挟み5条巡り、上端には突起が付される。胴部は結節縄文とLR単節縄文が横位回転施文される。

以上、扇平遺跡で出土した主な土器を図示したが、4～8・10は中期初頭でも古段階に位置づけられるもので、11～13・19～21は次の段階に位置づけられよう。14～17は北陸系の土器、18は東海以西からの搬入品と思われ、いずれも中期初頭の古段階に位置づけられよう。今後はこれら他地域の土器と在地系土器との型式学的検討、遺構での供伴関係に注目し、編年の横の繋がりも充実させていくことが課題といえる。

第63図　647P・752P　出土土器



第64図　625P　出土土器

出土石器　（第60・61図）

今回の調査で出土した石器は、石鏃・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・磨石・石皿・凹石・両極石器・剥片石器等があり、総数約250点を数える。これら石器の各器種の点数は整理途中の段階なので明言できないが、ひとつの大きな傾向として、打製石斧と磨石の出土量が他に比べ多いことが指摘できよう。これらの石器は中期初頭に比定される小竪穴を中心に出土していることから、該期の石器組成を検討するうえで貴重な資料を提示できるであろう。また、本遺跡が小竪穴を中心とした遺跡であり、集落でも日常生活を営む住居跡群とは異なった場であることは注意しなければならない。このような場での石器組成が、小竪穴群の性格を解明するための基礎的な資料となると同時に、小竪穴群を形成した該期の住居跡群石器組成との比較も興味深い問題である。

**（4）小結**

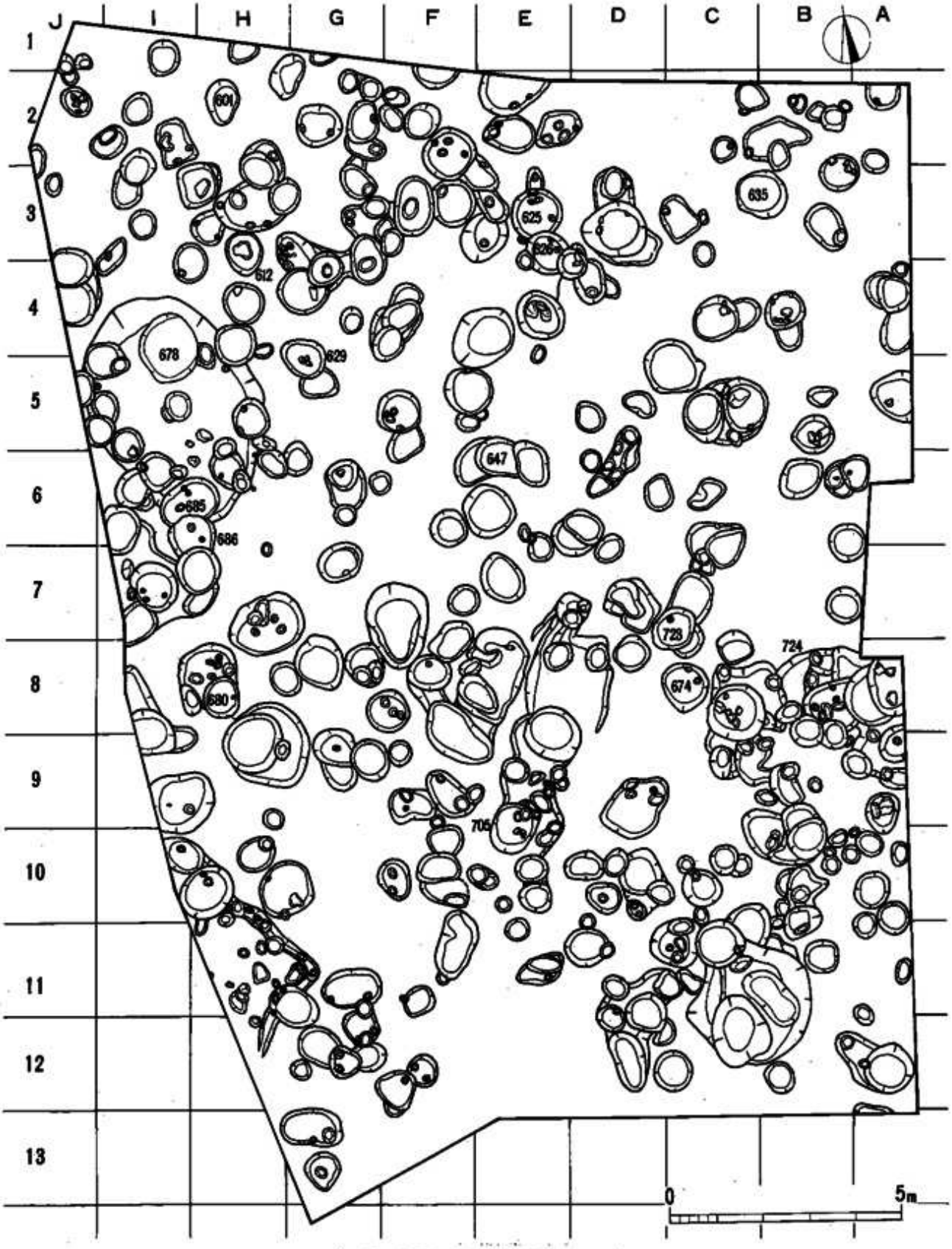
本遺跡は、縄文時代前期初頭の住居跡1基が重複するものの、その他はいわゆる前期末・中期初頭の単純な遺構群を検出した。その意味で集落構造あるいは、土器編年、石器組成を見る上で良好な資料となることは間違いないが、前回の調査報告「扇平遺跡」（註1）、また「梨久保遺跡」（註2）の記述に従って、該期の出土土器については中期初頭土器として一括提示・記述していることを理解されたい。

さて、本遺跡の主な遺構、遺物を提示し概観したが、その中心となるのが120基にも及ぶ小竪穴群であろう。これらは規模、形態からいくつかの群に分けられるようであり、覆土の堆積や遺物の出土状況をも考慮して、その性格を把握する必要がある。ただ、前記した情報だけでは120基にも及ぶ小竪穴の性格を把握するのは難しく、多分に主観的な解釈を導きやすいことも事実である。それは、千葉県高根木戸遺跡の袋状土壙から人骨が出土した例をあげ、本来貯蔵穴として機能していた小竪穴が、墓壙等他の目的に転用される可能性があると前回「扇平遺跡」（註1に同じ）で指摘した通りであり、有機質の遺物が残りにくい本地域では充分注意しなければならないと思われる。

そこで形態等で分類した小竪穴のうち、覆土の堆積や遺物出土状況の異なるものを抽出し土壌のサンプリングを行い、脂肪酸分析等の理化学的な処理を施し、客観的なデータを提示することが重要と考える。このようなデータが発掘調査で得られる情報をより意義深いものにすると同時に、小竪穴の性格も鮮明になると考える。

また、昭和46年度の調査では約200基の小竪穴を検出しているが、その調査面積を考慮すると今回の調査で検出された約120基の小竪穴の分布密度は極めて高いといえよう。これらの大部分が出土土器から中期初頭に比定され、前回調査された住居跡群とは若干時期を異にしており、本小竪穴群を形成した人々の住居跡群がどのような場所に占地するのか、今後の調査成果が期待されるところである。　（文責　三田村）

註1　「扇平遺跡」　1947年　岡谷市教育委員会　（郷土の文化財7）
註2　「梨久保遺跡」　1986年　同上　（　同上　16）（在庫有り）




第65図　扇平遺跡遺構全体図（1：120）

## 7．榎垣外遺跡下片間丁地籍

1．発掘調査の場所　岡谷市長地字下片間丁2381-6他
2．土地の所有者　大木次男　小林和弘　守屋力良
　　細谷佳教　小河原淳
3．発掘調査の期間　平成3年10月31日～12月30日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　306.6 ㎡
6．発見された遺構　平安時代住居跡4棟
　　掘立柱建物跡1棟　特殊遺構2基

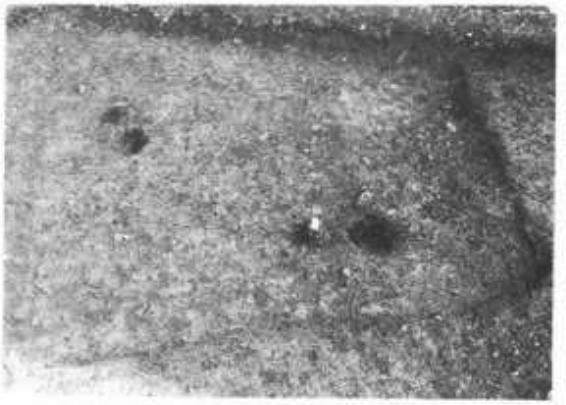
**6号住居跡**　調査区東端に検出された住居跡で、掘り込みが浅く約8ｃｍほどで床面になる。床は確認面である褐色土をわずかに掘り込んでおり、砂礫層までは掘り込んでいない。柱穴は深さ20ｃｍほどの穴が2本発見された。カマドは畑の攪乱を受けているためか石組等の痕跡はなかった。また床面にも火床面らしい跡は検出されなかった。

**7号住居跡**　東西約4．2ｍ南北約4．2ｍの方形の住居跡で、掘り込みは深く北壁で約35ｃｍを測る。床面はカマド周辺から住居跡中央部が特に堅い褐色土を掘り抜き、砂礫層を掘り込んでいる。柱穴は4本検出されたが明確な配置はない。またカマドの右側から貯蔵穴であろうか、小竪穴が1基検出された。カマドは残りのよい北壁に設置されているため、耕作による攪乱はなかったが住居が埋没するまでの間に構築材が崩れ、袖がやや短くなっている。天井石は崩れずに残っていたが、カマドの石組は予想外に貧弱で両袖とも大きな石は使用されていない。

**8号住居跡と特殊遺構1**　南北約5m東西約4mの住居跡で、周囲に細い周溝が全周する。壁の高さは南壁で約20ｃｍ北壁で約40ｃｍを測る。床面は全体に堅い貼り床である。床面から検出された柱穴は2本あるが、貼り床を剝がすとさらに4基の小竪穴が検出された。カマドは西壁側に設けられていたが、特殊遺構に切られているため僅かに痕跡が残っていただけである。

特殊遺構は、当初8号住居跡を検出した際に、竪穴北側の壁がやや不定形なため住居跡の重複と考えられた。しかし8号住居跡の床面を検出し、切り合い関係を精査すると特殊遺構が新しいことが明らかとなり、さらにカマドが壊されているなど、切り合いが決定的に判明した。特殊遺構は直径約3ｍ深さ約180ｃｍ の摺鉢状の竪穴である。遺構の性格は不明であるが、近年の官衙跡の調査では東京都の豊島郡衙跡から摺鉢状の竪穴が3基発見されており、形状が類似していることなどから官衙跡を考察するうえで貴重な発見となる。

**9号住居跡と掘立柱建物跡**　東西約4ｍ南北約3ｍの住居跡である。掘立柱建物跡との切り合いが確認さ



第66図　6号住居跡

第67図　7号住居跡

第68図　8号住居跡・特殊遺構1

第69図　特殊遺構1　土層堆積状態

れ、遺構検出の際9号住居跡の方が古いことが確認されている。西カマドは柱穴に切られている。覆土は薄く住居跡東側はかなり多くの柱穴に切られている。また、特殊遺構2としてあるがやはりここも一箇所に集中して不整形な穴が重なっているものである。掘立柱建物跡は2間×3間の建物跡である。今回発見された住居跡の特徴としては、住居跡の軸が共通していることである。これまでの周辺の調査では（山道端地籍、下片間町地籍）ほとんどの住居跡が南北を軸にして、北壁ないしは東壁にカマドを持つのに対して、今回は住居跡の軸が約45度ずれている点が注意される。従って本文中の北カマドの位置は正確には北東および北西壁に設けられたカマドである。掘立柱建物跡も南北をやや外れ、どちらかと言えば住居跡の軸に近く、集落を区分する手掛りとなる。

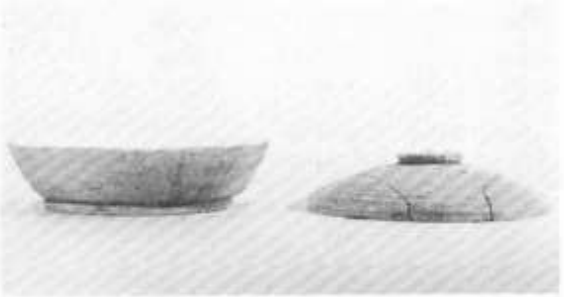
7、発見された遺物　土師器坏7　土師器甕3　須恵器鉢1　須恵器蓋1　凹石1　土錘1　土器片等1箱

今回一番多くの遺物が出土したのは7号住居跡である。掘り込みが深いため覆土が厚く保存状態が良かったため、カマド周辺から約3個体（整理中）土師器甕破片が散乱した状態で出土した。また床面近くから土師器坏が出土した。全体的に出土遺物のうち土師器坏の底部は回転糸切りのほかへら削りの物が比較的多く出土している。

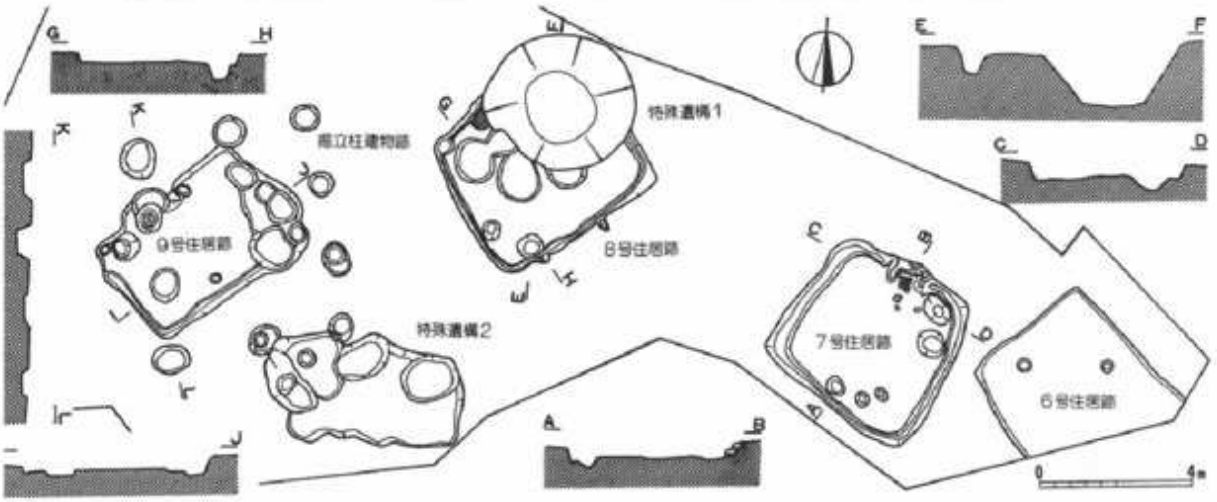
第70図　掘立柱建物跡・9号住居跡

第71図　7号住居跡　遺物出土状態

第72図　7号住居跡　出土土師器杯



第73図　須恵器杯・蓋（9号住居跡・7号住居跡）




第74図　下片間丁地籍　遺構全体図（1：200）

## 8．遺構の発見された試掘・確認発掘調査

**榎垣外遺跡向田通地籍**

1．発掘調査の場所　岡谷市長地字向田通4753-11
2．土地の所有者　山田　功
3．発掘調査の期間　平成3年4月26日～5月17日
4．発掘調査の目的・原因　駐車場建設
5．調査面積　67.8㎡
6．発見された遺構　平安時代住居跡1棟

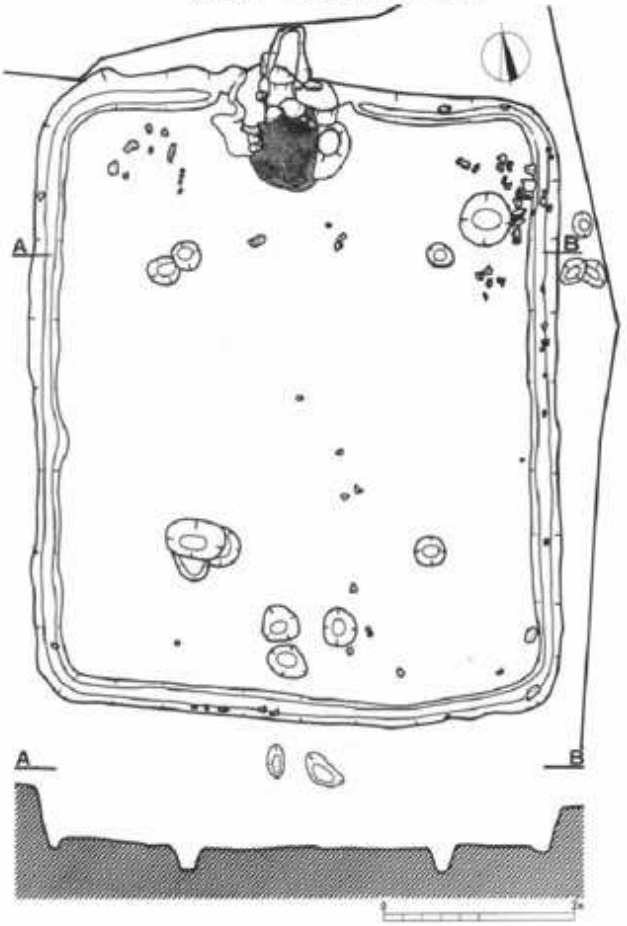
平面形は東西約5.5m南北約6.6mのやや長方形の住居跡である。遺構検出面が北から南に傾斜しており、北壁は62cmを測るが、南壁は僅か4cmほどを残すのみである。幸い残りの良い北壁のほぼ中央にカマドが設置されているため、カマドの右袖はかなり壊れてはいるものの、左袖や火床面の残りはよく、焼土の厚さは4cmである。またカマドの精査中、多量の土師器・須恵器片が出土した。周溝はほぼ全周するがカマドの両袖には達していない。また、東側の周溝内には小さな小穴が検出されている。柱穴は7本検出された。この内4本は主柱穴であるが、このほかに南壁際に3本の柱穴が検出され、何らかの構造をもった施設があったことを示すものと思われる。カマド東側に直径50cm深さ15cmほどの穴があり、その周囲から土師器甕等の破片や礫が集中して出土している。カマド西側には、炭化材が集中して検出されている。住居跡中央部の床面はやや焼けている堅い面がある。主に堅い床面があるのはカマド周辺から中央部、そして南西部にかけての範囲である。

7．出土した遺物　土師器坏3　土師器甕1　須恵器坏6　須恵器蓋1　墨書土器5　刀子1　土錘2　打製石斧1　炭化物（クルミ）1　鉄製品3

1号住居跡からは多くの土師器・須恵器が出土した。完形に復原できる物が比較的多くあり、しかも床面直上の遺物であるため遺構に伴うものとして考えられる。これらの中の土師器坏には「十」「土」「公」などの墨書土器が発見されている。このほか長さ8.5cmの大型土錘、4cmの小型土錘が住居跡南西部分から出土した。この他には土錘の出土はなく、平成元年度山道端地籍16号住居跡の土錘出土状況とは異なり、特に網などに装着してあったものではないと思われる。

第75図　1号住居跡

第76図　1号住居跡カマド石組




第78図　1号住居跡平面図（1：80）

第77図　1号住居跡出土遺物

**榎垣外遺跡下片間丁地籍**

1．発掘調査の場所　岡谷市長地字下片間丁2377-1
2．土地の所有者　小口ワキ　小口秀子
3．発掘調査期間　平成３年12月20日～12月30日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．発掘面積　85.1㎡
6．発見された遺構　平安時代住居跡２棟
縄文時代住居跡１棟

今回の調査では３棟の住居跡が発見された。10号住居跡、11号住居跡は平安時代の約３m四方の方形の住居跡である。11号住居跡は北壁カマドを持ち、左袖の脇には石組みがあってその上には多くの須恵器片が散乱していた。北壁の残りは良いが、南壁は確認面が傾斜しているため低い壁である。

**12号住居跡**　縄文時代中期中葉の住居跡であるが、畑の耕作や10号住居跡による攪乱を受け壁を検出することはできなかった。炉は石囲炉であるが、東半分は10号住居跡により破壊されている。柱穴は９本検出された。

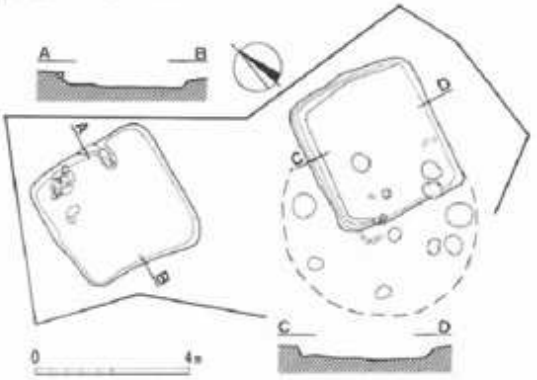
7．出土した遺物　縄文土器１　土師器坏１　須恵器坏１　須恵器円面硯片１　土錘１　打製石斧１

10号住居跡を検出中に縄文土器が出土した。12号住居跡覆土最下層からの出土である。

11号住居跡からはカマド左側に石組みが検出され、その上には多くの須恵器片が散乱していた。何らかの施設があったものと推定される。西壁際からは円面硯破片が出土した。これまでの付近の調査でも円面硯破片が幾つも出土しており、山道端地籍、下片間丁地籍の特徴であると言える。

第79図　11号住居跡

第80図　11号住居跡カマド脇石組遺物出土状態

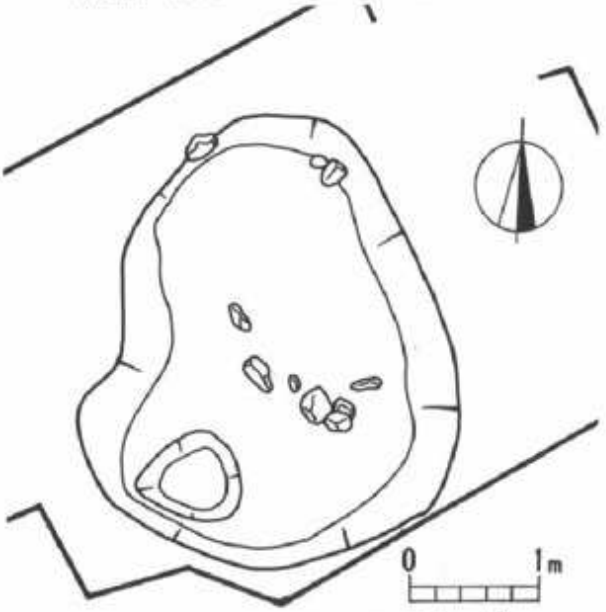



第81図　下片間丁地籍遺構全体図（1：200）

**榎垣外遺跡金山地籍**

1．発掘調査の場所　岡谷市長地字金山2931-1
2．土地の所有者　小口　長重
3．発掘調査の期間　平成３年８月19日～８月30日
4．発掘調査の目的・原因　共同住宅建設
5．調査面積　49.3㎡
6．発見された遺構　中世住居跡２棟

今回の調査では明確な掘り込みを持たない鍋底状の堅い貼り床を持つ遺構を検出した。炉址、カマドはなく、出土遺物もほとんどない遺構である。２号住居跡の床面には20cmほどの礫が数個あるが、意図的におかれたものではない。このような遺構は発見例が少なく平成元年度スクモツカ南地籍において２棟の発見がある。この時は平安時代末と推察したが、今回もやはり時期決定のできる遺物はない。




第82図　金山地籍２号住居跡平面図（1：60）

**榎垣外遺跡上村地籍**

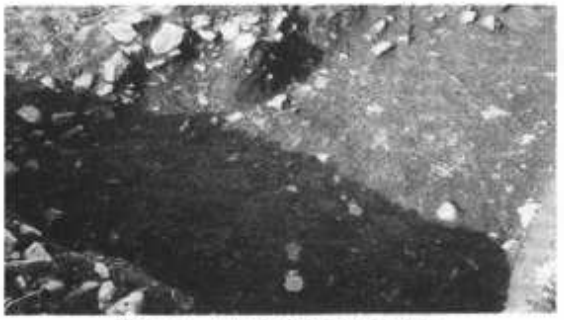
1．発掘調査の場所　岡谷市長地上村山3396-2他
2．土地の所有者　藤森　一男
3．発掘調査の期間　平成4年3月2日～3月10日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　28.8㎡
6．発見された遺構　平安時代住居跡1棟

今回発見された住居跡は北東角と北壁の一部を検出することができた。北壁の掘り込みが比較的深く27cmを測る。しかし平面形は地層のせいか不整形な壁で直線ではない。周溝はなく、柱穴は発見されなかった。カマドは東壁に設けられていると思われるが未確認である。床面も東壁に近づくに従い堅さを顕著にし、覆土の遺物も多くなる。

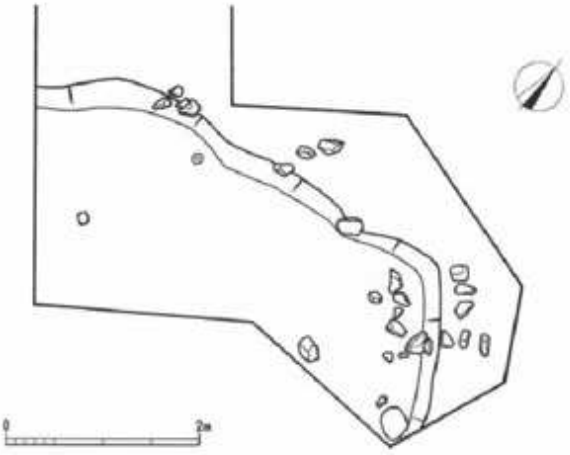
7．出土した遺物　土師器坏2

住居跡からの出土遺物は少なく、遺構検出面に近い覆土上層から完形の土師器坏が出土した。周囲からは直径20cmほどの石が多く出土していた。またこれより1mほど西のほぼ床面からも土師器坏が出土しているため当初この辺りがカマドではないかと推測されたが、焼土や構築材は検出されていない。

第83図　1号住居跡



第84図　1号住居跡遺物出土状態



第85図　1号住居跡平面図（1：80）

**海戸遺跡**

1．発掘調査の場所　岡谷市天竜町三丁目5317-7
2．土地の所有者　小口　嘉治
3．発掘調査の期間　平成4年3月9日～3月17日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　28.0㎡
6．発見された遺構　平安時代小竪穴1基

今回発見された小竪穴は直径160cmのやや楕円形で掘り込みは浅く約16cmである。確認面は地表下約40cmと比較的浅く、耕作の影響を大きく受けているためどのような性格の遺構なのか不明である。

7．出土した遺物　須恵器坏1　土錘3　磨製石斧1

攪乱のためあまり厚くない覆土の中から須恵器坏が出土した。遺構内からの出土遺物はこの他にはないが攪乱層、耕作土層等から土錘3点、磨製石斧1点、縄文、弥生、土師器の各期土器片が多量に出土している。

第86図　小竪穴

## 9．新都市開発遺跡発掘調査

### （1）唐傘平遺跡

1．発掘調査の場所　岡谷市湊唐傘平

2．土地の所有者　　湊財産区

3．発掘調査の期間　平成3年4月23日～
　　4年3月21日

4．発掘調査の目的・原因　新都市開発計画に伴い遺跡の範囲・性格・遺構の有無の確認を行う

5．調査面積　　112 ㎡

6．調査の概要

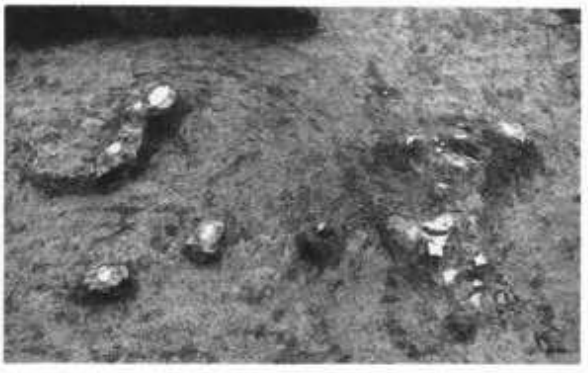
遺跡は標高1,027 m～1,040 m の高地に所在する。盆地状地形の平坦地は、かつて開懇された際に遺物の採集があったと言われており、現在でも石鏃が散発的に採集されている。発掘は最近までモトクロス場となって地膚の露出した平地を主体に、周辺の緩傾斜面17ケ所にA～Qトレンチを設定して行ったが、遺構の検出はH・Qトレンチに小竪穴各1基が検出されるに終った。

出土遺物は極めて少なく、Bトレンチを主に縄文時代土器片97点、石鏃3点、黒耀石剝片1点、磨製石斧片1点を検出したにすぎない。Bトレンチの出土破片は底部を欠くもののほぼ完形に復原できた。後期初頭の堀の内式土器に比定される深鉢形土器である。(第91図)

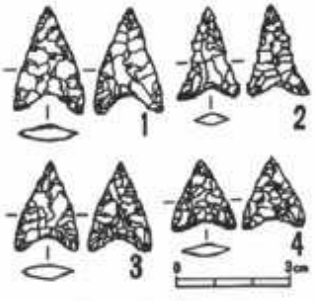
石鏃3点はいずれもBからQトレンチ周辺の採集品である。

市内では樋沢地区のような高原状地形の高地に縄文時代早期、中期初頭、後期の遺跡が展開しているため、これとよく似た唐傘平・梨平周辺も十分注意しなければならないが、ここは水が少ないためか大規模集落は存在しなかった可能性が強い。しかし、復原完形土器や精巧な作りの石鏃を遺していった原始の狩人はどこかに生活の痕跡を残しているはずであり、もう少し本格的な調査を必要とするであろう。

第87図　唐傘平遺跡　全景

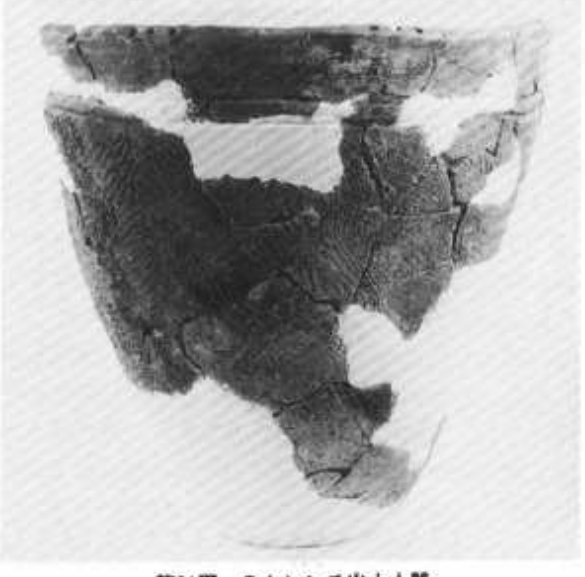


第88図　Bトレンチ遺物出土状態

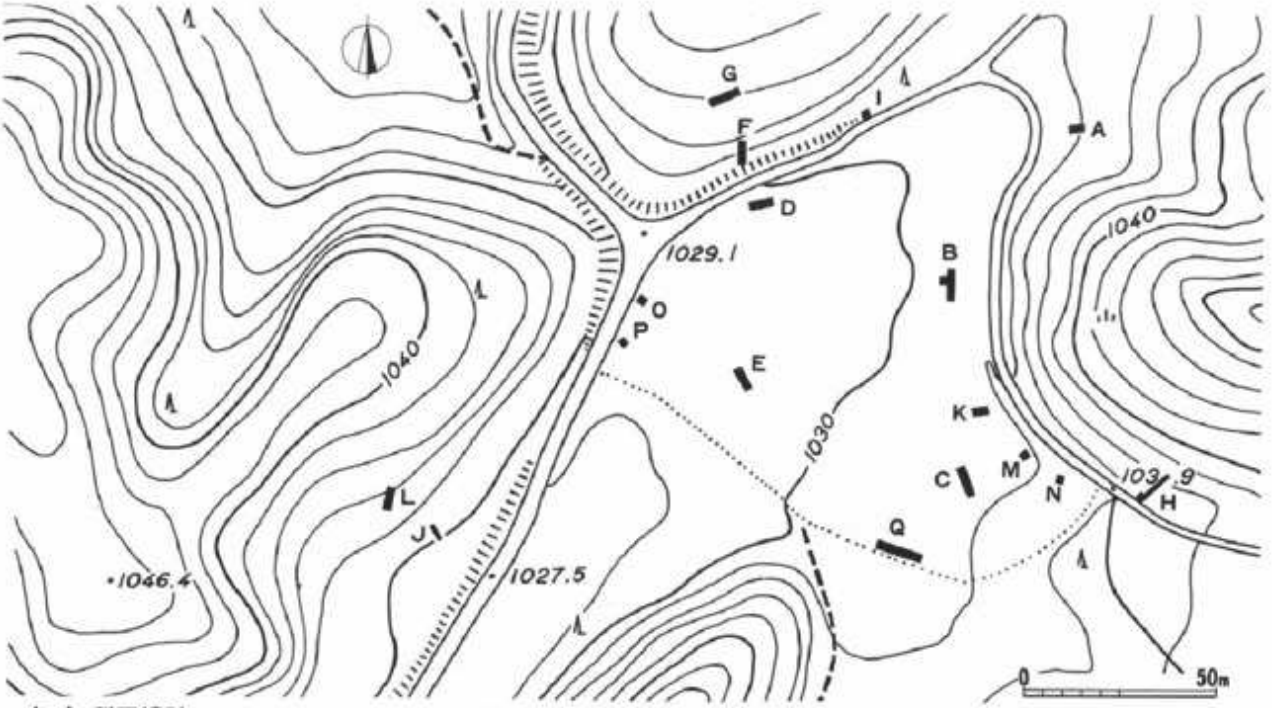



第89図　出土石鏃

第90図　Hトレンチ小竪穴



第91図　Bトレンチ出土土器




第92図　唐傘平遺跡　トレンチ位置図（1：2,000）

## （2）梨平遺跡

1．発掘調査の場所　岡谷市湊梨平

2．土地の所有者　　湊財産区、花岡生産森林組合

3．発掘調査の期間　平成3年4月18日～
　　4年3月21日

4．発掘調査の目的・原因　新都市開発計画に伴い遺跡の範囲・性格・遺構の有無の確認を行う。

5．調査面積　　124 ㎡

6．調査の概要

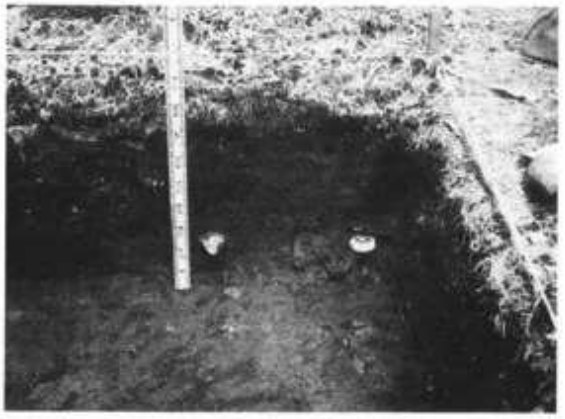
遺跡は鮎沢区を流れる本沢川を登りつめた山頂部の小盆地状地形の出口部に立地する。標高は1,000～1,020 m、南向きの緩斜面をキャンプ場に下る林道に遺物が採集されているため、その周辺20ケ所にトレンチを設定し発掘した。

発見された遺構はHトレンチに縄文時代早期の集石址をもつ住居跡が1基検出され、該期押型文土器を主体に土器片36点、完形の穀摺石2点、スクレパー2点が出土した。

また、Eトレンチでは平安時代住居跡の床及び壁が確認され、覆土中から灰釉陶器皿の大きな破片、土師器坏、甕破片29点が出土した。この住居は火災に遭っているらしく、床全面に焼土と多量の炭化材が検出された。

このほかAトレンチでも押型文土器6片をはじめ、石鏃1点、黒耀石剝片5点が出土、Mトレンチでは縄文時代早期の繊維を含む撚糸文土器の大型破片6点、N・Rトレンチでは穀摺石が各1点出土するなど、Hトレンチと関連する縄文時代早期の遺物が多量に出土した点は注目される。

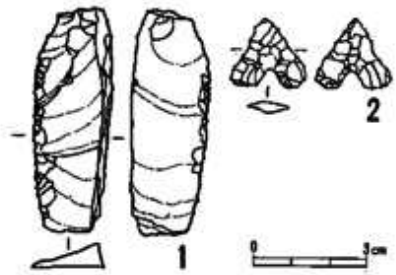
第93図　Hトレンチ集石



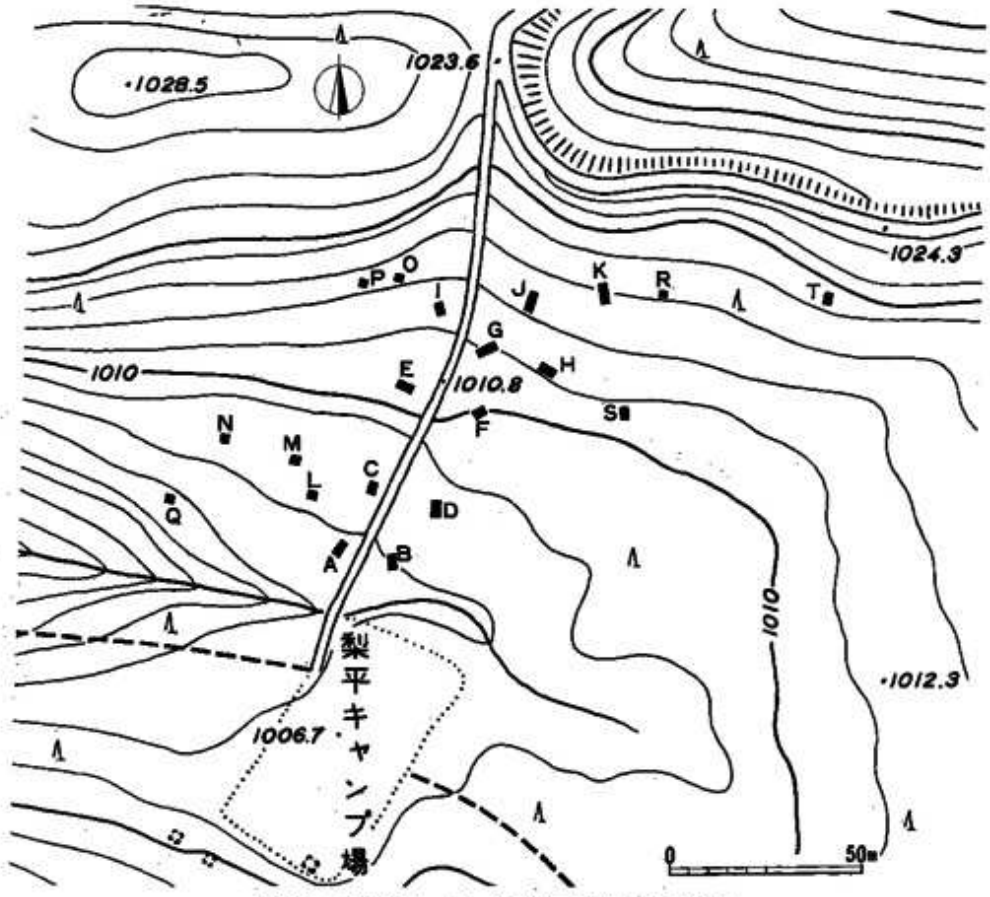
第94図　Eトレンチ灰釉陶器出土状態

また、灰釉陶器は榎垣外官衙跡の出土品と比較しても遜色のないものであり、須恵器壺や中型甕の破片の出土など、平安期は定住的な住居が複数存在したようであり、どういう性格の住居か、今後の大きな研究課題となるであろう。

また、キャンプ場南東側の緩斜面及び北西側尾根付近など要注意箇所は未調査であるが、豊富な水流を挟んでかなり濃密に縄文時代早期、平安時代各期の住居跡が埋没している可能性が強いので、広範囲の、かつ綿密な調査が必要であろう。



第95図　梨平遺跡　出土遺物



第96図　梨平遺跡　トレンチ位置図（1：2,000）

### （3）井揚・老婆久保遺跡

1．発掘調査の場所　岡谷市湊小坂588 番地653 番地他12筆

2．土地の所有者　小泉徳良　小泉勝喜他９名

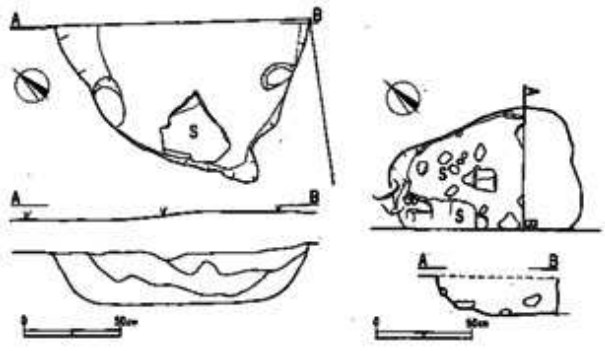
3．発掘調査の期間　平成３年４月23日～４年３月21日

4．発掘調査の目的・原因　新都市開発に伴い遺跡の範囲・性格・遺構の有無の確認を行う。

5．調査面積　152 ㎡

6．調査の概要

小坂地区では井揚汐下、狐穴日向、井揚、老婆久保、



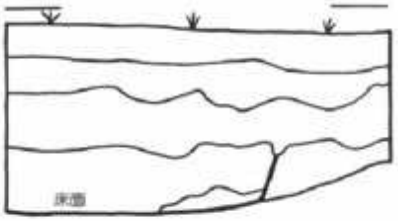
第97図　井揚遺跡　小竪穴

矢垂の5遺跡にトレンチを計14本設定して152㎡を発掘調査した。このうち遺構が確認されたのは井揚遺跡と老婆久保遺跡の2ケ所であった。

井揚遺跡では小竪穴3基と、縄文時代早期土器片若干が出土、老婆久保からは縄文時代中期の住居跡1基が確認され、打製石斧や凹石と該期の土器片若干が出土した。

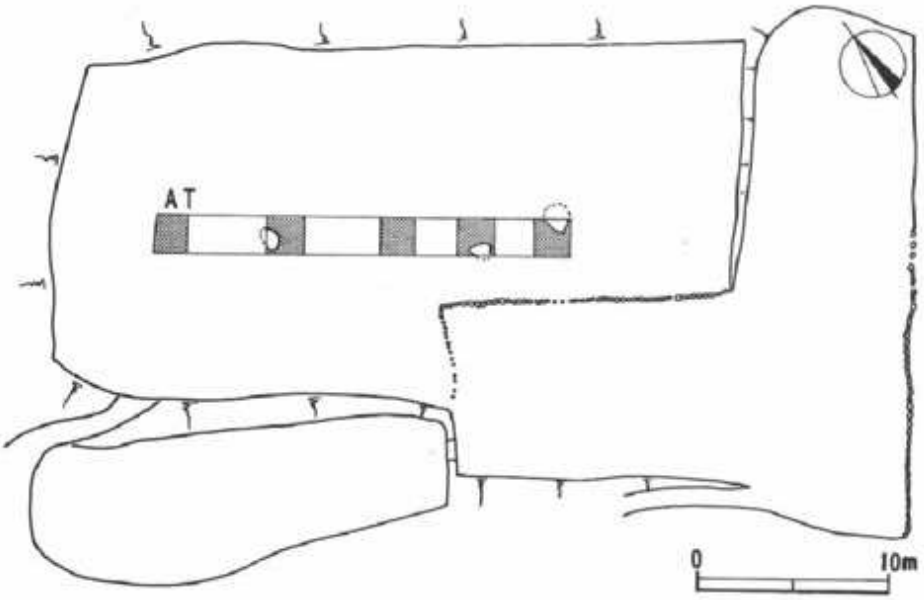
そのほかの3遺跡では遺構の検出はなく、出土遺物も微量であることから遺跡の範囲は大巾に縮少されよう。

第98図　老婆久保遺跡全景

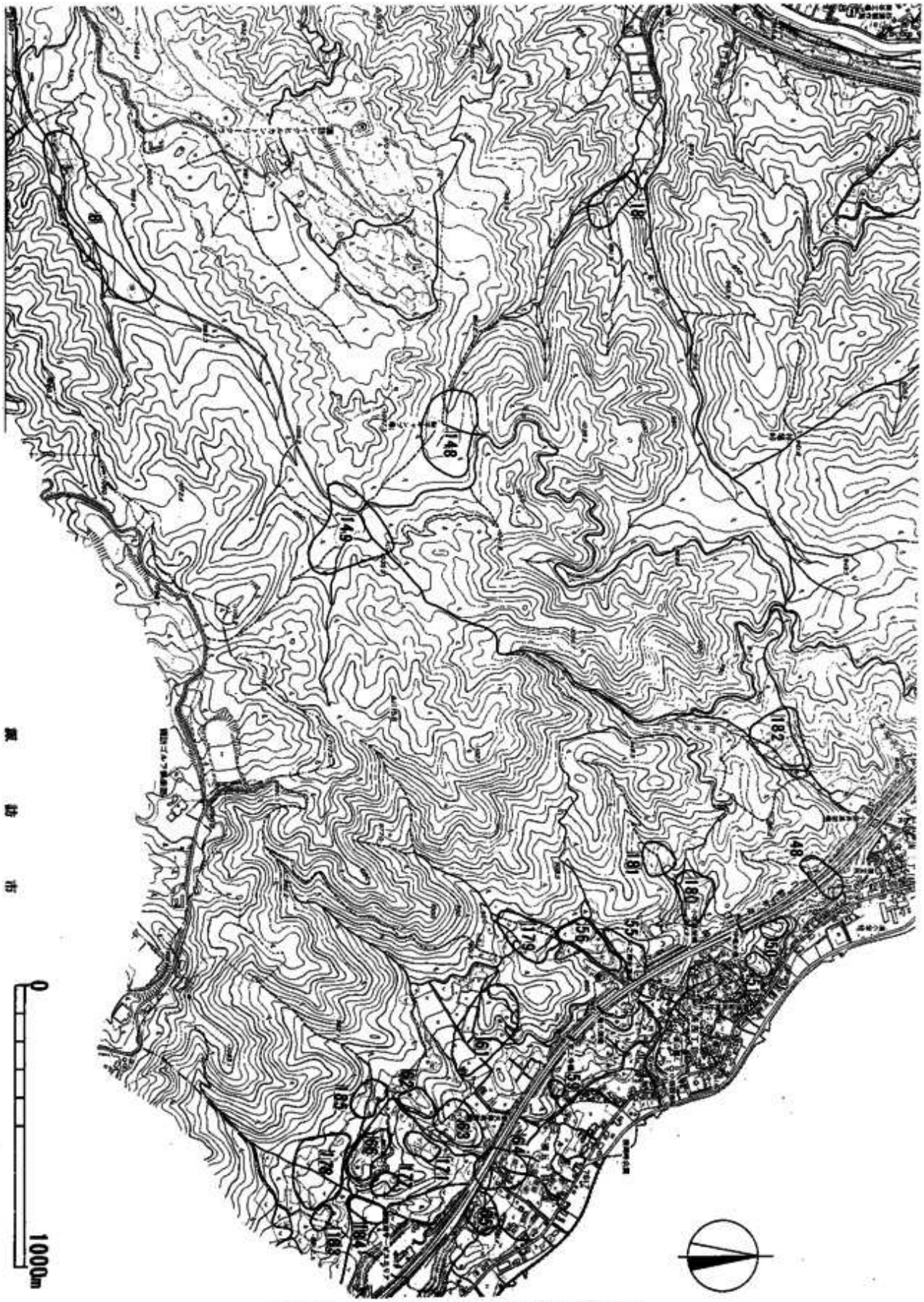



第99図　Aトレンチ遺構検出セクション図

第100図　Aトレンチ3区




第101図　老婆久保遺跡トレンチ位置図（1：400）




第102 図　湊、小坂地区遺跡分布地図（1：20,000）